生服を着た少女の事。彼女の微笑。彼女の動作。たゞ名前だけはもう彼の頭に殘つてはゐなかつた。ヘレナと云つたか知ら？　それともオルガだつたか知ら？……

時々發作に襲はれると、ロベィコは苦しげに咳き入つた。すると、彼の眼の前はぼうつと綠色にぼやけて行つて、色々の考へも、幻も、朝霧のやうに散つて了ふのだ。

發作が過ぎて了ふと、彼はがつかりと疲れ切つて、目を瞑つたまゝ靜かに横になつてゐる。さうすると又散らばつた色々の考へが、知らず識らずの間に再び結び寄つて來る。

今日は又、いつになく、どうした事か家の中がひつそりかんと靜まり返つてゐた。臺所でセナートルの妻君が、フライパンをどたばたさせる物音も、不思議と今日は聞えて來なかつた。そほつと廊下を通るラファイル・アントノウキッチの、あの軋るやうな跫音も、今日ばかりは聞えなかつた。たゞ閉め切つた戸を通して、低い私語聲が絶えずロベィコの耳に這入つて來た。はつきりとは聞きとれなかつたが、彼は頻りと耳を欹てゝゐた。

突然戸を敲く音がして、續いて內氣な女らしい聲が聞えた。

『同志ロベィコ！　這入つてもよくつて？』

『えゝ、どうぞ。』

彼はさう答へて、戸口の所の女の姿に眼をやつた。そこにはリザ・グラツチョーワが立つてゐた。

『ひどく咳きこんでらつしたのね。同志ロベィコ！　妾の部屋迄聞えましたわ。妾、直ぐお隣りの部屋に居りますの。そこの壁一つ向ふですわ。……ほんの少しばかりだけど、妾、牛乳を持つて來て上げましたわ。……何か他に御用はなくつて？』

ロベィコは、半分開いてゐるそこの戸口を透して、廊下の方から差し込んで來る一筋の黃色い光を見た。

もう直ぐこの女も行つて了ふ。戸が閉まる。すると又以前の通りの暗らがりが自分を包むのだ。そして又たつた獨りぼつちになつて了ふのだらう。……こんな考へに捉へられて、ロベィコは餘計しみ〴〵と、見棄てられた自分一人の淋しい姿を振返つた。もう直〻と死んで行く。だから、勿論何んにも要らない。牛乳なんか飲んだつて仕樣がない。……だが、彼はもうこれ

以上、獨りつきりでゐる佗しさに堪えられなかつたのだ。

「御親切にどうも有難う。」

彼は心の底から禮を云つた。

ほんとに嬉しかつた。

「濟みませんが、ちや燈火を點けてくれませんか。それから、よかつたら、一緒にお茶でも飲みませう。ね？」

リザはスキツチを捻つた。そして振返つた拍子に、思はずはつとして輕い叫びをあげた。ロベイコの枕布は一面血だらけになつてゐた。咳をする度に口から迸り出たものであらう。彼自身も氣着かなかつたものと見えて、今初めて驚いたやうにそれを見た。

「まあ！　大分お惡いやうですわね。……枕布を、妾、新しいのとお取換えして上げますわ。この二三日、どなたもお見えにならなかつたのね。」

ロベイコの行李を掻き廻し乍ら彼女が云つた。

「妾も　餘つ程　御見舞しやうかと　思つて　居りましたの。でも何んだか、妾、恐はかつたの

よ。」

ロベイコは微笑んだ。

「そんなに危險に見えますかね？」

「いゝえ、今はもうそんな事なくつてよ。でも、いつものやうに、外套を着てゐると、……さうするとあなたはつんとしてゐて、とても近寄れないやうな氣がしますわ。」

彼女が自分の事を心配してゐてくれたのだ、と思ふと彼は何んとなく快い氣持がした。彼はちよつとドギマギと、人の好ささうな微笑を浮べた。リザはそのまゝついた微笑を見た。妙に眼れ上つた血管が青く走つてゐる、痩せ衰へた男の頸筋を見た。心から彼が氣の毒でならなかつた。彼女はもうちつとも彼を恐はがつてはゐなかつた。何故ならば、彼女はそこに、力も强さも失はれて了つた、頼りない、病氣に虐まれた痛ましい彼を見たのだ。

「何所へお勤めですか？」

彼が訊いた。

「妾？　赤兵の先生をして居りますの。でもこの三日ばかり、大隊の人が皆んな材木を伐りに

僧院の方へ參つて居りますので、妾、休んで居りますわ。えゝ。」

『もう行つて了つたんですか?』

ロベィコは急き込んで訊いた。

『カラウロフは反對してゐたが、……だが、一體薪木は間に合ふ心算なのかな?』

彼は眞直ぐに床の上へ起き直つた。リザは勞働土曜の仕事の時、コンムユニスト達から聞いた事、自分の知つてゐる事を殘らず話して聞かせた。そして彼女は、男の顏に赤く輝く熱心さに依つて、如何にこの報告が彼にとつて大切であるか、貴重であるのかを知つた。

普段、よく、彼女にはよく解らないやうな六ケしい事ばかり云ふので、非常に悧巧な人だと思つてゐる、あのマルチィノフよりも、今のロベィコはもつと〳〵悧巧に見えた。彼女は今、このロベィコの眞劍な、びくともしない死の覺悟を目の前に見て、若し靈魂不滅の信仰が無かつたなら、どうしてこんなに勇敢に、死に直面する事が出來やうかと考へた。

夜更けてから、リザは自分の部屋に歸つて行つた。別れしなにロベィコは、もつと度々來てくれるやうに、何度も何度も頼んだ。

廊下の方から聞えて來る重々しい足音と、騒がしい人聲が彼女の睡眠を破つた。戸外にも部屋の中にも、青白い薄闇がひろがつてゐた。

ふと、リザは不安になつた。重い扉に遮られて、言葉はよく聞きとれなかつたが、彼女は荒々しい人聲や、けたゝましい叫び聲に混つて、多勢の足音を聞いた。

彼女は震へる手でやつと着物を着た。そして戸口の所へ忍び寄つて、細目に扉を開け乍ら、そつと外の方を窺つた。そこには廊下にも、臺所にも、軍隊外套や毛皮の半外套を着た、見も知らない百姓達がうろ〳〵としてゐるのを見た。彼等の手に握られた、銃だの、手斧だの、鶴嘴だのが薄明りの中につめたく光つてゐた。彼女の眼には、瞬間、この風雨に曝された田舍者らしい鬚むしやな澤山の顏の中に混つて、三人の見識り越しの人の姿が浮び上つた。

肌着一枚のロベィコは、顏中にかけて毆打傷の痕も生々しく、血を滲ませて、手を後ろへ縛り上げられ、跣足のまゝつめたい床の上に立つてゐた。

リエビンは、——彼はロベイコの直ぐ前に立つてゐた。リザは彼の横顔とその鉤鼻を見た。いつものやうに綺麗に鬚を剃つてゐた。だが、いつものサキエートの軍帽は冠つてゐなかつた。その代りに今日は、青いリボンを着けた黒の毛皮帽をしてゐた。彼は煙草をふかしてゐた。そしてちよつと顔を顰めると、手に持つてゐた鞭で、自分のエナメル靴をはたいた。この鞭を見た瞬間、リザには直ぐと、あのロベイコの顔に滲んだ眞紅な打撲傷のわけが解つた。

それから又直ぐその脇に、ロベイコの顔の前へ脅すやうに拳固を振りかざして、セナートル氏が何やら頻りと身振り混りに罵つてゐた。——小つぽけな太つちよの體軀をよち〳〵させて、肌着の袖を二の腕までもまくり上げて。

『アハ、同志ロベイコ！　今日と云ふ今日は、あんたともどゆつくりとお話が出來る。……今日はもう我々お互ひに、以前通りの對等だ。……おい！　聞えねえのか、懲役人！　もう貴様の指圖なんか受けんぞ。貴様の仲間は俺の藥局を取り上げやがつた。——俺は默つてゐた。貴様達は、今度は俺の家へやつて來て、家宅捜索をし初めやがつた。そしてこの俺を、やま師だとぬかして、拘留にしくさつた。——俺は默つてゐた。すると貴様達は益々附け上りやがつ

て、無理やりに、押し掛けに、俺の家へ捩ぢ込んで來やがつた。間代も拂ひやがらねえでよ、——それでも俺は默つてゐた。おい！　中央委員會だか、サキエートだかの代理議長さん。お大相な肩書ごとサタンに攫はれちまへ！……フン、それでも貴様あ、お代官様か。ヘン、笑はしやがる。このへちやむくれの破戸漢奴！』

ラフアイル・アントノウキッチはもう息が切れて了つた。暫く喘いで新しい空氣を吸ひ込んでから、更に聲高に喚き出した。

『だが、さういつ迄は閊屋が卸さねえ。もう貴様達も年貢の收め時だらうぜ。狂犬か何かのやうに、かためて置いて擊ち殺してやる。あしたになりや、俺様の藥局から、貴様達のあの穢らはしい看板を引つ剝がしてやる。聞えねえのかよ、おい！　この俺様の藥局からだよ。さうだ、俺はお金持だ。さうだとも、俺はブルヂョアだ。昔はさうだつた。これからもいつ迄もさうなんだ！　そして貴様あ見窄らしい泥棒犬なんだ。だから、これからいつ迄もさうでゐろ。……アハハ、今度は貴様が默つてゐるのか。……まあ、口をおきゝなさいよ、同志ロベイコ！　あんたはいつでも、お立派な雄辯家でゐらつしやつたじやないか。まあ最期の想ひ出に、存分

饒舌つてお置きなさるが良い。私達は喜んで傾聽仕りませうわい。』

セナートルは恭々しくロベイコの前にお辭儀をした。リエビンはほくそ笑んだ。暴徒達は大笑ひに笑ひこけた。臺所の方からも、リザは含み笑ひを聞いた。彼女は戸口の所に、セナートルの妻君の笑ひ顏を見た。その剝き出した齒、眼の周圍の小皺、それから紫色の花のついた黃色い朝衣を見た。

『貴樣默つてるな、何んにも云はないのか。』

セナートル氏は急に又呶鳴り出した。

『お禮のしるしにこれでも受けろ、おい！……』

彼はロベイコの顏にカツと痰を吐きかけた。

ロベイコは跪いた。縛めを引き切らうとして身を悶えた。しかしその時、黑い髯を生やした百姓が、いきなり彼の肩をひつ掴んだ。ロベイコは、その男の鐵のやうな鷲掴みの中で、力なく身を廻した。セナートルの痰は額から眼の上にかけてダラ〳〵と流れ落ちた。

ロベイコはどうにもかうにも、この毒々しい痰唾一つ拭き去る事も出來なかつた。何故なら

ば、彼の兩手は縛り上げられてゐた。憎惡と輕蔑に燃えた眼差しを、彼の周圍で嘲笑してゐる人々の群の上に滑らして行つた。その拍子に、ふと彼の眼には、戸口の所に立つてゐる蒼白いリザの面差しが映つた。——彼の顏には幽かな微笑が浮んだ。……そしてこの微笑の中にリザは、如何に彼がこの虐待と侮辱の下に惱んでゐるかと云ふ事、同時に又、まだ彼の氣は挫けてはゐない、敵を恐れてはゐない、輕蔑してゐるのだと云ふ事、をはつきりと見て取つた。そしてリザには又、彼は昨日の會話を想ひ起して微笑んでゐるのだ、と云ふ風は思はれた。

このロベイコの微笑を見ると、彼女はハツとして正氣に歸つた。鋭い叫び聲を上げて、彼女はリエビンの所へ走り寄つた。そしていきなり彼の手を掴んだ。

『同志リエビン！　何故あなた方はこの人をお苛めになるの？　この人は民衆の爲に戰つてるんぢやなくつて？……それにお前さん達は皆んな、……』

彼女は暴徒の方に振り返つて叫んだ。

『この人はお前さん達の味方ぢやないの、え？　お百姓や勞働者の味方、……』

嘲笑と罵聲の中に彼女の聲は消されて了つた。

優さ形な、好男子の、いつもは親切さうなリエビンは、力一杯彼女を突き離した。リザはよろ〳〵とよろめいて、厭やと云ふ程壁に突き當つた。そこへ持つて行つて、リエビンの長い厭やらしい罵言が浴せかけられた。

『飛んだ愁嘆場だ。おい皆んな！　その男を戸外へ引き摺り出せ。それから塀に立たせるんだ。進め！……』

多勢どや〳〵と戸口を潜つて出て行つた。頭を抑え乍ら、リザは床の上から立ち上つた。

『この女つちよ迄おちよつかいを燒きやがつて、ほんとに呆れたもんだよ！　こいつもボルシエビストの片割れなんですがね、士官さん！』

セナートルの妻が叫んだ。ラフアイル・アントノウツチはリザの肩を小突き廻してゐた。丁度その時、突然、庭の方から鋭い銃聲が一發響いて來た。瞬間、リザの頭に閃いた。

（ロベイコが撃たれたのだ！）

彼女は張り裂けるやうな叫び聲を上げた。リエビンさへギヨつとして飛び上つた位であつた。その隙に彼女は、セナートルの手を振り切つて、階段を駈け下り、暗い庭の方へ飛んで行つた。

……丁度出口の所で、何んだか着物の塊りのやうなものに躓いた。その中には人間の身體が呻き乍らびくついてゐた。そしてそこに、彼女は、石の闕の上に頬をすり寄せた、血みどろになつたロベイコの顔を見た。もう一遍恐ろしい叫び聲を張り上げて、狂氣のやうに庭を通つて街路へ走り出た。後ろの方に、家の中から又續けさまに二發の銃聲が響いて來た。

リザは家並の外れ迄駈け通した。そこから今度は靜かな露路に曲つて行つた。そして猶ほも駈け續けた。暫くすると彼女は息が切れて止つて了つた。彼女は耳を欹てた。――誰も後から追つ掛けては來なかつた。

小さい家々は靜かな暗闇の中に眠つてゐた。たゞ遠くの方から、銃聲があたりの靜けさを破つて響いて來る。たまに機關銃がガタ〳〵と鳴つた。時々、一陣の風が街路を通つて吹き去つた。リザはしみ〴〵と、寒さが骨身に沁みこんで來るのに氣が着いた。彼女はたつた一枚の襯衣を身に着けてゐるだけだつたのだ。脊筋と云はず、腕と云はず、ぞをつと戰慄が走り過ぎた。

彼女は又、夢中にたゞ前の方へ歩いて行つた。そして靜かに獨り忍び泣いた。こみ上げて來る涙は、止めどもなく彼女の頬を傳つて、音もなく雪の上に落ちて行く。ビクビクと戰いてゐたあ

のロベィコの身體に觸れて以來、彼女を襲つた恐怖の發作は、もう消えてはゐたのだが、わけもなくただ彼女は泣いたのである。

かうしてリザは、何んにも考へずに、ぼんやりと長い事歩いて行つた。彼女の身體はもう芯の芯迄凍え切つて了つた。痲痺れて感覺を失つた兩手を固く握り合はせてゐた。

木の枝がしだれかゝつてゐる灰色の庭の籬に沿ふて、リザがとぼとぼと歩いて行つた頃、東の空はもうそろ〳〵と白み掛けてゐた。

その時、彼女は急にギョつとして、まるで根でも生へたやうに立止つた。籬のすぐ傍の、蒼白い雪の上に、彼女は何ものとも解らないどちゃ〳〵の塊りを見た。彼女には何んとなく、それが人の身體の輪廓らしい氣がしたのであつた。

彼女は又叫んで飛んで行かうと思つた。たゞ駈け出して大聲に叫んでやりたかつた。だが、彼女は、胸の底からこみ上げて來る本能的な恐怖を押し匿して、籬の所へ歩み寄り乍ら、まだはつきりとしないその暗い對象物を見究めやうと努めた。

彼女は一歩々々近寄つて行つた。足が深い雪の中に埋つた。——忽ち、眞實に突然、彼女の

眼には恐ろしいものが映つた。そして彼女には、はつきりと解つた。輕い叫び聲を上げて、彼女はべつたりと雪の上に坐つて了つた。

ビリ〳〵に引き裂かれた着物、その所々の破れ目から、蒼白い裸體の皮膚がほんのりと見えてゐた。女の着物だ。そして女の身體だ。露はに見える左の乳首の上からかけてどす黒い傷口。差し伸された露はな腕。そして、——その顏。……堅く鎖されたその兩眼。引き釣りなりに結ばれた、血の氣のない唇。ばら〳〵にほぐれて、雪の中に無殘にも踏み込まれた亂れ髪。——それはアニュタ・シンコワの顏であつた！

リザにはもう叫ぶ力もなかつた。泣きもしなかつた。濕っぽい雪の上を這ふやうにして、彼女は死骸の方へ近寄つて行つた。その重い頭を地面から抱き起して、氷のやうにつめたい頰を手の平で觸つて見た。

空はもう中頃迄も青くなつてゐた。森羅萬象は曙の光の中に、各々色づいて來た。この場末の小つぽけな家々も、黑褐色の道も、灰色の木々も、皆、々、々。

地平線の一點が特に目立つて、刻々と明るく輝いて行つた。丁度あすこらあたりに、一杯積ん

だ材木でも燃えてゐて、その焔が段々高く吹き上げられてゐるやうにも見えた。あすこの下に太陽があるのに違ひない。そしてうす蒼白い堆雪や、家々の屋根の上には、殆ど解らない位の薄い薔薇色の光が映つてゐた。

一刻々々とうすれ行く黎明の光の中に、リザははっきりと眼の前の顏を見た。憎惡と苦惱の痕をまざ〳〵と刻み込んだその歪つ顏。眼を瞑つた生白い死顏。ついこの間迄、リザは、この顏が美しく輝いて、喜びに充ち滿ちてゐたのを見た。彼女にはもうこの人生と云ふものが、終焉になつたやうな氣がした。そこには空つぽの、死んだやうな家が殘つてゐる。續けさまに同じやうに聞えて來る單調な、――これも亦死んだやうな、――機關銃の響。

云ひやうのない心もとなさに襲はれて、リザは悅ばしげなこの春の日の出の、望み多い、純眞な美しさの中に見入つた。……この不思議にも澄み切つた空氣よ！　一體誰の爲なのだ？　誰にとつてあの輝しげな太陽が必要なのだ？　何故あの騷々しい機關銃の響の中に、歡喜に充ちた鐘の音が鳴り響いて行くのか？

聞くが良い。鐘の音が悅しげに鳴り響いて行くではないか。……町を通して、復活祭の鐘の

音が擴つて行くのだ。そしてその響は、やがて、今や町の兩側から聞えて來る、小銃や機關銃の爆聲の中に溶けこんで行く。

鳴り續けるこの復活祭の鐘の音が、ふと、リザに「神」を想ひ出さした。……神？　神がどこに居るのだ？　自分自身に彼女はもう神を感じなかつた。……彼女はあたりを見廻した。……鎧戸を閉め切つた小さな家々。蒼白い堆雪。仄白い空。機關銃の爆聲。そうして鐘の音。今の今迄、あんなに陽氣に、悧巧に、美しく輝いてゐた乙女の死骸。――何所に神が居る？　鐘を撞き鳴らして、僧侶達は、神の御名に於て、この暴虐と死の一日を禮拜してゐる。あの鳴り續ける復活祭の鐘の音の中に、多分神が居るのか知ら？

ロベィコの言つた事は眞實だつた。人生は戰ひなのだ。向ふに見えるあの灰色の家々の群、低い籬のうしろから、小銃の音が響いて來る間は、――さうだ、まだ戰ひは終つてはゐないのだ。かうしてコンムユニストが戰ひを續けてゐる間、この人生は依然としてこのまゝ續いて行くのだ！

リザは雪の上から身を起した。跪いたまゝ、彼女はアニュタ・シンコワの死體を抱いた。そ

してそのつめたい額に口をつけた。彼女はよろめき乍らやつとの事で立上つた。寒さの爲に足が痺れてゐたのだ。彼女は、手近かに銃火の響いてくる方向へ、出來るだけ足早に歩いて行つた。

一一

扉がほんの二三秒程開いた。……地下室の濕つぽい暗ら闇の中へ、懐中電燈の灯影がゆらめくやうに差し込んだ。

二聲三聲罵り聲と共に、どんと突かれて、クリーミンは地下室の中へ轉がりこんだ。又以前の通りの闇があたりを包んだ。その中にたゞ、小窓が幽靈のやうに仄の青く浮び出してゐた。地下室の階段を上つて遠離つて行く、人の跫音が空虚に響いて行つた。

最後の突かれ方が餘りひどかつたので、クリーミンはどうとばかりに打ち倒れて了つた。……彼はやつと起き上つて耳を欹てた。何か知らん物音を聞いたやうな氣がした。

「誰かゐるのか?」

「クリーミン?」

「スタルマコフか?」

兩人はお互ひに聲で解つた。闇の中で堅い握手が交された。クリーミンは呻いた。

「氣を着けろよ、スタルマコフ! 俺や肩をやられた。」

會逅の喜びの瞬間は過ぎ去つて、又兩人はしみ〴〵と今の有樣を想つてゐた。兩人共重苦しく氣が鬱いで行つた。

「同じ穴へ兩人共落ちこんで了つたんですね。クリーミン! ……だが私あ嬉しいよ。ほかならぬあんたと一緒に、私の生涯の最後の一夜を明すのかと思ふとね、私あ、……だが、もしもあんたが、今ここぢやなくて、あの銃聲の聞えて來るあすこにゐてくれたらなあ、そりや私あもつと〴〵嬉しいんですがね。……だが、一體どうして又奴等の手に捕つたんですね?」

「ゴルニイチが俺を探して、委員會へ行くやうに忠告してくれたんだ。我々の部下は、そんなに永く俺を待つてはゐられなかつたと見えて、徐々と驛の方へ歸つて行つた。だから俺は、委員會の方から銃聲を聞かなかつた。左側の脇の方から聞えて來たんだ。委員會の直ぐ前の所で、俺

は伏兵に出つくはして了つた。彈丸は右の肩に當つた。……腕が直ぐガクリと來た。……でなけりや、何んでをめ〳〵、生き乍ら奴等の手なんかに落ちるもんか。奴等は勿論、直ぐ俺だと解つた。あの破戸漢達の中で、このクリーミンを知らないやうな奴が何所に居るもんか？　奴等は俺をうんと云ふ程ひつぱたいた。……だが、一體どうしたのかな？　たとへちよつとの間でも、かうやつて俺達を生かしたまんま、うつちやらかして置くのは變だな。驛の方から餘り發射されるので、それでこの俺迄もうつちやつて置きやがる。……お前、カラウロフを見つけ出したかい？」

「いゝや、……どこかへ馬で行つたつて話だつたが、どこへだか私あ知らない。……私もやつぱり伏兵にやられたんですよ。それでも、私あ一疋つめたくしてやつた。三發目で自殺してやらうとしたんだが、彈丸が云ふ事をきゝやがらない。……私達を殺す事はそれやわけない。――だが、奴等、きつとひどく苛めやがる心算なんでせうぜ。兎に角、私あ强制租税を到る所の村々で、容赦もなく取り立ててやつたんですからね。だが、まだ奴等、私に氣が着いてゐないらしい。あゝあ、煙草が吸ひたいな、クリーミン！　もうとても我慢し切れない。だが、煙草よりもつと〳〵以上に、たゞ私あ生き度いんですよ。」

スタルマコフは强いて笑はうとしたが、駄目であつた。彼は短い溜息を吐いた。

「クリーミン！　あんたが今私の側にゐると、私あもう救助の事を考へるんですよ。何故つて、いつだつたかも、あんたは私を危く救つてくれましたつけね。覺えてますかい？　あの時、租税を徵集しに行つた時さ。」

「あゝ、覺えてるよ。だが、今更そんな話した所で、何んにもなりやしない。」

「うんにや、もう利き目が現はれてゐまさあ。あの時、あんたが部下を連れてやつて來たあの時、私あもう首の周圍へ繩を捲きつけられてゐましたつけね。あの時、私あもう確かに死を覺悟してゐた。そこへあんたが來て助けてくれたんだ。多分もう一遍さう云ふ工合になりはしますまいかね？」

「馬鹿をお云ひ、同志スタルマコフ！　もうかうなつちや俺達も運の盡きだよ。俺はあの時、サーベルで手の繩を切りほどいてやつた時の、あのお前の眞蒼の顏をまだようく想ひ出せるよ。あの時、初めて俺達は知り合ひになつたんだつけな、……」

「さうだ、さうだつたな。あれ以來一年半と云ふもの、あんたと交際つて來た。あれから私達

は一緒に地方委員會で働いた。……あんたに會ふといつでも嬉しかつたよ。私はもつと度々、あんたと話したかつたのだよ。――だが、兩人は會ふといつでも、ただ、「今日は」とか、「ちよつと火を借して？」とか、……云ふ位のものだつたつけ。……」

兩人は默つた。銃聲は益々驛の方へ遠離つて行つた。その音は刻々と鈍くなつて行つた。

身に受けた虐待や、それに貧血や、今迄押しかくしてゐた興奮の爲に、クリーミンはひどく疲勞してゐた。彼は床の上に寢つころがつて、額をつめたい床石の上に押し當てた。そしてぼんやりと考へた。

彼によつて死刑の宣告を受けた、いかに多くの人々が、それこそ數百人の人々が、丁度今のクリーミン自身と同樣に、かうやつて特命委員會のこの地下室の中で、やがて來る可き死を待つてゐた事であつたらう。彼はあのスユリコフの手紙の中の文句を、一字々々はつきりと想ひ浮べて見た。他人の肉體の苦悶に對する、スユリコフの同情深い言葉の意味を想つてゐた。

その時ふと、あの懐しいアニュタ・シンコワに對する癒癒れるやうな戀慕の情が、まるで鞭の打撃のやうに彼の心を打つた。

アニュタ・シンコワ！

もう彼女にも會へないのか。……いゝや、そんな事はない。どんな事があつても、もう一遍彼女に會はなければならない！　クリーミンの頭の中を、色々な脱走の計畫が、まるで燃え熾る焰か、彩をなす渦卷のやうに廻り始めた。彼は戸口の頑丈さうな閂を思つた。小つぽけな引き窓を思つた。……だが、永らくこの特命委員會の議長をしてゐた彼は、その間にたゞの一人も、この地下室から脱走したもののなかつた事を、餘りにもよく知り過ぎてゐた。救ひの望みは全くない。それは明白な事だ。……

さうかうしてゐる内に、銃火は又激しく鳴り出した。そして再び近着いて來る模樣であつた。

『味方が近着いたんだ。』

クリーミンが云つた。スタルマコフは答への代りに、何かぶつ〳〵罵つた。その憎々しい長い罵言の中には、燃え上る希望の響をほのめかしてゐた。

戸の向ふに跫音が響いて、鍵の音がガラ〳〵と鳴つた。

『連れ出しに來たのだ。』

スタルマコフが云つた。クリーミンは何か答へやうとしたが、その時、既に兩人はもう鷲掴みにされてゐた。蹴られたり、殴られたり、……

『奴等、こつちへ引つぱり出せ。犬奴！　畜生！』

闇の中に轟くやうな聲が響いた。

『奴等をお首領の前へ連れて行け！』

クリーミンは抵抗しやうとして、頻りと悶掻いた。だが、いきなりガンと一つ、頭の所へ棍棒の一撃を食らつた。彼は意識を失つて打ち倒れた。そして、まるで穀物袋か何かのやうに、狹い不潔な階段を、ずる〳〵と引き摺り上げられて行つた。スタルマコフは一人で默つて歩いて行つた。血だらけな彼の痘瘡面は、いつものやうに穩やかに平然としてゐた。

夜はもう全く明け放たれてゐた。うす青白い朝であつた。薔薇色の光が帶のやうに東の空にたなびいてゐた。

スタルマコフは、二人の百姓に引き摺られて行くクリーミンの生白い顏の上に眼をやつた。彼の眼差しは、やがて、二階家と高い壁に取り圍まれた特命委員會の、その大きな中庭の方へ

移つて行つた。以前仲間の酒保が經營されてゐた小つぽけな小屋の壁には、明るい空色をした旗が立て掛けてあつた。そのわきに小銃が束になつて置いてあつた。帽子に青い徽章を附けた若者が一人、頻りと、その中から、開閉機の工合の良ささうなのを探してゐた。スタルマコフの額に赤く口を開いた傷口が、戸外の風に吹かれて火傷のやうに痛み出した。

『あゝ、——あゝ、こりや面白い。誰かと思つたらお前さんかへ。——ドミトロフ縣では頗る御叮嚀に强制税をお取り立て下さつて、いやはや、まことにどうも有難う、同志スタルマコフ！まあ見ろよ。何んて云ふ大した獲物ぢやねえか。そこにゐるのは、え？』

スタルマコフは憎惡に充ち滿ちた罵り聲を聞いた。皺くちやな毛皮帽の下に、赭ら顏の綺麗に剃られた顏から、挑戰的な灰色の眼付きが向けられてゐた。士官の革帶をキチンと締めた、すらりとした姿。……

『お解りになりませんかな、え？　私達はこれでも古い御知己だ。ぢや、ほんとに想ひ出せないんですね？　つい二三日前、ロストウゼフさんのお宅で、あんたは、軍事專門家のリエビンと云ふ男の證明書をお調べになつた筈ぢや。私ですよ。在方の村々の事に就いて、色々と細か

く御氣をお配り下さつて、何んとも早や、感謝の至りでごわすな。――お禮も申さなくつて、どうも大變失禮した。――だが、もうお借りも無いと云ふもんだ。」

手桶一杯のつめたい水を頭からひつかけられて、クリーミンはやつと正氣に歸つた。彼はふら〳〵とよろめき乍ら立ち上つた。寒さの爲に思はずぶる〳〵と震へ上つた。頭がはち切れさうに痛んだ。

立上りしなに、彼は、二人の若僧に手をとられてゐるスタルマコフの方へ眼をやつた。もう一人他の、青い下着一枚の若僧が、太い革帶で力一杯スタルマコフの背中を毆つてゐた。若僧の、髯も生へてゐない、その骨張つた顏の上には、細い眼の中に、快樂の色が輝いてゐた。スタルマコフは時々呻いた。その呻き聲と一緒に、忿怒に震へた呪ひの言葉が彼の口を漏れて行つた。

リエビンは建物の入口の所に立つてゐた。クリーミンの方へ振向くと、さも忌々しげに微笑んだ。何か彼は云はうとしたが、その瞬間向ふの方で呼ばれた。――彼はいかにも不本意らしく、澁々とそつちの方へ離れて行つた。

負傷者が一人、廣庭を擔がれて行つた。その蒼白い顏は苦痛の爲に歪んでゐた。それでも、通りすがりに、仲間の肩に凭れかけてゐた頭をやつと持ち上げて、スタルマコフを毆つてゐる若者達に向つて叫んだ。

『うんと打ちのめしてやれ。かまふ事あねえ。どし〳〵やれ。若いの！　良いか、……おい、ひつぱたけ、ワシィカ！　もつとひつぱたけ。』

五六町と離れてゐない地點から、機關銃の爆聲が盛んに響いて來た。廣庭の上を掠めて、泣くやうな、響くやうな音を後に引き乍ら、時々外れ彈丸が飛び去つた。すると又、その規則的な機關銃の爆聲を壓し消して、突然、勝鬨を上げる忿怒に燃えた人聲の、力强いどよめきが擴つて行つた。その間に混つて、呻き聲だの、訴へるやうな悲鳴だのが混然と溶けて行つた。……銃火はどし〳〵近着いて來た。刻一刻と繁く、外れ彈丸が廣庭の上を掠めて、二階の窓を打ち碎いたりして行つた。

リエビンと、それから一緒にもう一人他の士官が、廣庭の中に飛び込んで來た。クリーミン

はその士官の洋服に肩章があるのを見た。

『馬を用意しろ。――』

リエビンが叫んだ。そして兩人は又忙しげに廣庭を出て行つた。

スタルマコフの虐待は自然に止まつて了つた。暴徒達は馬の所へ飛んで行つた。スタルマコフは支へを失つて、よろ〳〵と雪の上に打ち倒れた。彼の背中からタラ〳〵と流れた鮮血が、淋漓として赤く雪を染めた。

クリーミンは走り寄つて助け起さうとした。彼の兩手が眞紅な血潮に染まつた。

スタルマコフは呻いた。身を震はした。そして何やら罵つた。だが、直ぐよろめき乍らも立上つた。悲しみに滿ちた、歪んだ顏をぼんやりと動かし、彼はぢいつとクリーミンの瞳の中に見入つた。そして血の氣の失せた、土のやうな、灰色の唇をわなわなと震はせて、幽かに私語いた。

『何んて寒いんだらう。……もう何もかもおしまひだな！』

クリーミンは彼の肩を抱いてやつた。そして最後の力を振ひ起して、廣庭のずうつと隅つこに建てられた小さな假小屋の方へ、彼を引つぱつて行つた。

『さあ、來いよ。此所に匿れてゐやう。ひよつとするとこのまゝ奴等、俺達の事を忘れて了ひやがるかも知れんよ。』

小屋うちの仄明りの中に、後頭部を馬糞の中に埋めて、形も解らぬシマンの死體が、朱に染まつて轉つてゐた。×××××××××××、腹綿と一緒に馬糞に混つて、土間一面に散らばつてゐた。×××××××××××××××××××××××××。引き裂かれた裸麥の袋が脇に轉つてゐた。恐ろしい斷末魔の苦惱が、その小さな、痩せほゝけた、頰の飛び出したシマンの顏の上に、まざ〳〵と印されてゐた。片一方の眼玉はひどく刳られてゐた。もう一つの方には、眼鏡の硝子の碎片が、そのまゝぶちこまれてゐた。

『この男もやつぱり、强制稅を手嚴しく取り立てた仲間なんですよ。』

スタルマコフは嗄れ聲で私語いた。そして倒れるやうにそこの木片の上に腰を下した。兩手の中に彼は深く顏を埋めて了つた。

その內に銃火は益々近着いて來た。外れ彈丸が、廣庭に殘つてゐた暴徒の一人に當つた。――

けたゝましい叫び聲とともに、その男はばつたり雪の上に打ち倒れた。

負傷者が家の中から擔がれて來て車に積まれた。もう一つの車には、小銃がぎつしり積み込まれた。戸口の所から二人の士官と、もう一人の男が飛び出して來た。その男は、——立派な新調の毛皮を着込んで、——二つ三つの紙挾みを小脇に抱えこんでゐた。士官達は軍隊拳銃を手にしてゐた。彼等は先づ輕い方の車を先へ出さした。ついこの間、クリーミンが驛からアニュタ・シンコワを連れて來た、あの同じ車であつた。スタルマコフの事も、クリーミンの事も、もう皆んな忘れて了つたやうに思はれた。

丁度その時、突然、馬の口から泡を吹かせて、リエビンがいきなり廣庭の中へ乘りかけて來た。彼の顏は眞蒼で、忿怒の形相も悽じく、興奮し切つた面持ちであたりを見廻した。

『俘虜の奴をここへ引つぱり出せ。』

彼は叫んだ。

『一體どこに行きくさつたんだ?』

口汚い罵言を浴びせかけられて、クリーミンとスタルマコフは小屋の中から引き摺り出され

た。

スタルマコフの冷やかな、憎惡を籠めた眼差しは、忿怒に燃えたリエビンの灰色の瞳の底を凝視した。彼は何か云つてやらうとした。その瞬間、既に一發の銃聲は高らかに響き渡つた。意識を失つた彼の身體は、手足を丸めてころりと雪の上に打ち倒れた。

二發目の銃聲が續いて響いた。二人目の身體は、最初の死體の上へ、同じやうにまろび倒れた。車の後を追ふて、リエビンは馬を飛ばして廣庭を出て行つた。

十五分間ばかり、この人氣の絶えた廣庭の雪の眞中に、二つの死體が寂然と横たはつてゐた。銃火は刻々と近寄つて來た。そして又再び、今度はあべこべの方向へ遠退いて行つた。今ではもう極くたまにしか、この人氣のない廣庭へ彈丸は飛んで來なかつた。

太陽はもう紅い雲の上にかゝつて、空は明るい藍色に染まつて行つた。

ゴルニイチは手に拳銃を握つたまゝ、そこの廣庭へ飛び込んで來た。彼の後から續いて三人の男が這入つて來た。黑の毛皮の半外套を着込み、同じ黑の毛皮帽に赤い星の徽章を附けてゐ

た。その頑固な、骨節強い、どす黒の手には、無雑作に小銃が握られてゐた。それは鐵道のコンムユニストであつた。彼等は直ちに小屋の所へ駈けつけて、中を調べ始めた。

ゴルニィチは直ぐ雪の上の黒い塊りの所へ飛んで行つた。遠くの方からもうその顏を見わけた。……死んだ眼。半分閉ぢられた穏やかな唇。その下には、微笑がしばし假睡んでゐるかのやうにも見えた。そうして今にもその微笑がふつくらと口邊に浮んで來て、白い齒がキラリと光る。細い網目のやうな小皺に掩はれた灰色の皮膚の上に、まだ〳〵若々しい輝きが浮んで來る。と、そんな風に思はれた。……

クリーミンのつめたい頭を膝の上に抱き起して、ゴルニィチは突つ伏すやうに、その物言はぬ顏の中にぢいつと見入つた。すると突然、彼の心の奥底から、思ひも寄らぬ、云ひやうのない嗚咽が、わくわくとこみ上げて來るのに氣が着いた。腹の底から胸の奥からこみ上げて來て、咽喉の所迄も迫つて來た。……ゴルニィチは涙も乾き果てた眼で泣いた。彼の胸の中には、一つ切りではなく、無數の心臓が動悸打つて、それが又皆んな悶え、掻き拐られてゐるやうな、そんな苦悩の重荷が彼の心の上にのしかかつて來た。

二

雪解のあとの黒茶けた地肌と、殘雪の薄青い丘の色合ひが遠くの方に迄打ち續いて、不思議な美しい模様を織りなしてゐる。日に〳〵新しく形を變へて行くその色々の極りなき變化さへも、やはり單調な物憂い氣持を與へてゐた。

カラウロフは鋭くあたりを見渡した。ぢいつと周圍の靜けさに聞き入つた。手綱を巧みに手操り乍ら、用心深く蹄音を忍ばせて馬の蹄を進ませた。

彼の前方には、水の干からびた谷川や、丘や、濠が見渡せた。この約五六町に亘る廣い眼界の中を、お互ひに連絡をつけ乍ら、三箇の赤衛軍の前哨線が動いて行つた。彼は皆んなに騒がないやうにと命令を發した。それでも數千の足が地上を踏み鳴らす騒音は、滔々たる怒濤のやうにカラウロフの耳に響いて行つた。耳聰い野山のけもの達は、狐とか、野兎とか、野鼠とかは、もう數基米の向ふからこの物音を聞いた。遠くの方からまるでごう〳〵と鳴り渡る單調な、あの

草原の大洪水のやうに聞えた。けもの達はこつそりと四方へ逃げて行つた。つい二三時間前にカラウロフは、頑丈な小馬に跨つて、この同じ道を、丁度反對の方向に、町から僧院の方へと走らせてゐたのであつた。僧院には特命委員會の大隊がゐたのだ。

彼が僧院に馬を駈つたのは、たゞ單に赤兵の森の作業を監視したり、電話で發した自分の豫防手段の命令がよく行き屆いてゐるかどうかを見廻る爲だけのやうに見えた。だが、事實はその爲ばかりではなかつた。何んと云ふ事もなく或る漠然たる本能が、彼を町から駈り立てゝ、出來るだけ大隊の側にゐるやうに命じたのであつた。そして又同じその漠然たる感じが、彼をして、時々馬を停めては、自分の後ろに横たはつてゐる町の方へ、鋭い聞き耳を欹たしめたのであつた。

だが、そこには暮れて行く黄昏の空の下に、全ては穏やかに平和に横たはつてゐた。そこはかともなく感ぜられる、香り高い、凉しい、價千金の春の宵の靜けさがこの地上を支配してゐた。

その内にあたりも全く暗くなつて行つた。西の野の果てにもつれてゐた眞紅な夕陽の名殘りも、青黑い空のさ中に消え失せて、一つ星がさもうら恥しさうに燦めき初めた頃、その時、カラウロフの鋭い耳は、町の方から續け様に三つの遠い銃聲を聞きとつた。

カラウロフは馬を停めた。深い靜寂。烏が一羽鳴き去つた。そして彼は又遠い〳〵所から、かすかに銃聲を聞いた。續けさまに鳴り響く、——雜然としたあらゆる音の錯綜。

彼は拍車を當てた。鞭の一打ちに、小つぽけな草原馬は、急速な規則正しい足並で、薄明りの中によくは見えない低い溝や、穴や、凹みを巧みに除け乍ら、ひた走りに走り出した。

僧院に着いた時、彼は電話の命令が間違ひなく實行されてゐるかどうかを調べて見た。あらゆる應急策はうまく行き屆いてゐた。彼は大隊長に向つて、簡單に策戰計畫を說明してから、十五分間ばかりの後、もうキチンと身動きもせずに整列してゐる赤兵の前に立つて、いろ〳〵と情況事態を說明して聞かせた。

やがて馬を並べて野の方に向つた時、彼は大隊附きの檢察官ダニロフに話しかけた。その男は優形な綺麗な青年で、幅の廣い赤のズボンを穿き、革の上着を着てゐた。

カラウロフはいろ〳〵と、この暴動の政治上の意味を聞かせてやつた。ダニロフは默つて注意深く聽いてゐた。そして頑丈な頸の上に似合しからぬ、これは又きやしやな綺麗な頭で頷いた。

革命前迄、ダニロフは鑛夫であつた。字の書けない事は今でも同じ事である。『共產主義ＡＢ

C』を彼はまだ終り迄讀み切つてはゐない。だが、他の赤兵の連中は、彼のその『質樸』な所を愛してゐた。それは、彼がいくら華美なおしやれな着こなしをしても、皆んなの眼にはちやんと解るのであつた。カラウロフは、しかし、その男を、勇敢で、正直で、さつくばらんだと云ふ廉で、ひどく愛してゐた。それに又、兩人は丁度良い飲み友達であつた。

その間、隊長のセレツキーは絶えず、大隊の向ふの端からこつちの端へ馬を馳つて、萬端遺漏はないかどうかを調べたり、監視したりして廻つた。……手配りは行き屆いてゐるらしい。——さうだ、前哨線も着々前進してゐるし、機關銃も、——中央部と右翼に配置してあるし、斥候も出されてゐる。騎馬前衛も同樣に、……

全て必要な手段は施された。暫く經てばセレツキーはもう一遍敵に向つて突擊するのだ。そして再び、あの昔からなる、それでゐていつも乍ら新しい、眞に迫る戰ひの課題を、人間の血潮と生命を以つて解くのであらう。もう一遍敵に突擊するのだ。……暴徒に向つてか？

相手は誰であらうと、——同じ事ぢやないか？

宗教と云ひ、國籍と云ひ、階級と云ひ、畢竟するに、それに依つて大がかりな兵隊ゴッコと

云ふ、丁度セレツキーにとつてはあの恍惚として陶醉する阿片のやうな働きを持つた、お得意の死の遊び事の抽象的概念が、その表現の形を見付け出す、たゞ色着けられた性質の相違點か、又は具體的の關係を指してゐるばかりのものぢやないのか？　彼は今、丁度七年前に、自分が旗手セレツキーとして、自分の中隊の眞先きに立つて、——獨逸の奴原に向つて、——突擊したあの當時の勇しい光景を想ひ出してゐた。いかに彼が感激に充ち滿ちて、祖國の爲に英雄的死を憧憬してゐたかを想ひ浮べてゐた。

その內に、——塹壕內の退屈な生活や、病氣や、負傷の苦惱の中に、彼の愛國熱はいくらかさめて行つて了つた。するとその代りに彼の心には、全人類が今や既に年餘に亘つて行つてゐる、この死の遊戲に對する病的な興味が芽ぐんで來た。この世の中が始つて以來の遊戲である。そして同時に子供達の一番愛する遊戲である。……

この大隊長のセレツキーに取つて、相手が獨逸人だらうと、ポーランド人だらうと、チェツク人だらうと、コサツクだらうと、或ひは又白衛軍であらうと、暴徒であらうと、そんな事はどうでも良い事なのであつた。——何んでも構はないのだ。兎に角、何か知らん目當にさへなる

敵があれば良いのだ。味方と同様に防禦線を張つて、斥候を虫の觸手のやうに伸し、銃火を打ち撒いて、そして突擊して來てくれさへすれば良いのだ。損害とか、負傷とか、死とか云ふものは、たゞ交戰兩軍の數量的の變化を表示する、云はば代數的の數字に過ぎないのである。

だから、朝方受取つた電話の命令は、丁度敏感な駿馬にちよつとした拍車の接觸が働きかけるやうな作用を、このセレツキーの上に與へた。彼は張り切るやうな緊張振りを示した。彼はどし〳〵命令を實行した。一日中首を長くして、撤營進軍の信號を待ちあぐんでゐた。それでカラウロフがやつて來た時も、ちよつとも驚きはしなかつた。

彼は半時間隔き位に、ちよい〳〵とカラウロフの所へ馬を飛ばして來ては、簡單に策戰の經過を報告した。彼の考へを話したりして、扨て恭々しく訊く。

『何か御命令はございませんか？　同志旅團長！』

カラウロフのこの男に對する疑念は、段々と薄らいで行つた。彼は心の中で思つた。

（いや、この男は大丈夫だ。裏切つたりなんかはすまい。）

事實、セレツキーはそんな眞似をする筈はなかつた。裏切りは遊戯の規則に反するからだ。

一遍この遊びの中で、どちらとも立場を定めた以上、もう終ひ迄それを通さなければならないのだ。さうでなければ遊戯の興味は全然殺がれて了ふ。

第一中隊が左翼を編成した。

暗い人の群がそこの道を動いて行く。影法師のやうに默々として歩いて行く。その中にも自づから、組織と、內部的の連絡が保たれてゐる。各人は各々、その隣りの兵も、先へ行く兵も知つてゐた。皆んなはどんなに輕い命令をも聞き逃すまいとしてゐる。

政治の指揮者のスピチィンは、小銃を堅く肩に押し擔いで列に加はつて行つた。

時々、彼は自分の考へを、私語くやうに、隣りのフィディンに漏した。その男は獅子つ鼻のずんぐりした若者で、薄碧い悧巧さうな眼付きをしてゐた。

彼は何んでも云はれた事をよく了解した。そしてそれを又全部記憶してゐた。……彼の理性は、丁度乾いた砂が渚の水を吸ひこむやうに、あらゆる智識を貪り吸つた。若くしてもう既に、露國共產黨の候補者に擬せられてゐるこの生徒の事を、スピチィンは頻りと誇つてゐた。だ

が、可笑しな事には、近在の村から親類の者がこのフィディンを訪ねて來ると、まあ例へて見れば彼の父親とか、あの猾るさうな眼をした赤つちやけた髯だらけの太つた百姓、でなければこの兄と同じやうな碧い眼をした、無口な、悲しさうな姉妹達が訪ねて來る、そして兵營の何所か隅の方で、こそ〳〵と、私語聲に何か長い會話を始める、――さうすると、そんな時、彼の顏は暗く曇つて行つて了ふのであつた。暫くの間はむつつりして、このスピチィンとも一言も口を交はさないやうになつて了ふ。

しかしスピチィンには解つてゐた。暫くうつちやつて置けば、この若者は急に自分の考へを爆發させて、戸板に水を懸けるやうに饒舌り始める時が來る。さうすると、まるで堰かれた水が迸るやうに、顏を眞紅にして、眼を輝かせ、右手を同じ恰好に激しく振廻し乍ら、滔々として辯じ立てるのであつた。――どうも稅吏の家屋評價は不公平極まる。地方委員は賄賂を取るし、民兵や、食糧檢察所の惡弊は目に餘る。それやこれやで、農村生活は殆ど絕望的の混亂狀態に呻吟してゐるのだ。等、々、々。

そんな時、スピチィンは默つて口を出さずに聞いてゐる。そして一通り濟んだ頃になつてから、彼は徐ろに淳々として說いてやるのであつた。露國に於ける革命のいかに困難であるかと云ふ事、百姓達はそんな色々の惡弊に對して、自身反抗し戰ふ事を知らないのだ、そして更に、多勢の異分子が黨の中へ這入りこんで來て、それ等の奴が、改善に向ふ色々の活動や發達を、意識的に邪魔してゐるのだ、彼はそんなやうな事を詳しく話して聞かせた。

何か社會的の所屬を訊かれると、スピチィンはいつでも――『村の住人』と答へる。彼は事實、村の仕立屋であつた。農夫に屬してゐるのか、勞働者の部に這入るのか、自分でも知らなかつた。身長の高い男で、喘息持ちの、それに禿頭で、おまけに蒼白い雀斑だらけの顏をしてゐた。規則的の輕い足取り。その小さい眼はいつも開放的で、そして卒直に輝いてゐた。

スピチィンとフィディンがかうやつて話し合つてゐると、兩人の周圍には定つて多勢赤兵の一群が、熱心に耳を傾け乍ら寄つて來る。時々質問を發しては、兩人の會話に口をさす。……そしてこの『政治家』のスピチィンは、いつでも皆んなに解り易い簡單な言葉で答へてやる。何故ならば、彼も矢張り田舍出の一人で、百姓達の言葉をよく知つてゐた。

赤兵連はこのスピチィンと會話するのが好きだつた。たゞ困る事に、彼の聲は非常に嗄れ聲

であつた。だから皆んなはちよい〳〵彼に向つて、「もつと大きな聲で、」と注意しなければならなかつた。だがいくらさう云はれて見た所で、馬鹿げた大きな聲は出せなかつた。そんな大聲でやり出すと、彼は直ぐ話の絲筋を失つて了ひ、あやふやになつて來て、矢鱈に解らない外國語を混ぜ始めたりする。彼自身も勝手の意味で、ぼんやりと大凡その當ずつぽうの意味で使つてゐるのであつた。

今も今とて、防禦線の中で、戰ひの前のこの靜かな危險の迫つてゐる瞬間にでも、皆んな、あちらからもこちらからも、頻りと彼の所へ寄つて來て、煙草をつけたりし乍ら、色んな事を訊きくのであつた。

「一體、相手は何んなんです？　どう云ふわけなんです？」

スピチィンは、この百姓達の心の中に横たはつてゐる困惑の情を察した。內心の不安、何故ならば、……何故ならば彼等は、これから、自分達の仲間に向つて進軍しなければならないのだ。……百姓に向つて、……露西亞人に向つて、自分達自身の兄弟に向つて、……

てきぱきとした落ち着いた言葉で、スピチィンは暴徒の事を話してやつた。そして心の中に、

デニキンだの、ユデニッチだの、コルチャックだのの事を想ひ浮べてゐた。……

再び防禦線は暗い野を横切つて進んで行つた。空は青く澄み切つて、仄のかに星が燦めいてゐた。一町毎に町の銃火は、はつきりと手にとるやうに聞えて來た。

丁度その時、急に、人から人へ、班から班へ、中隊から中隊へと命名の聲が響き渡つて行つた。

「止れ！　右へならへ！」

彼等の前には、もう町の灯がチラ〳〵と、二つ三つ仄のかに輝いてゐた。横の方に蒼白く河の流れが光つてゐた。眠つて了つたカラウロフを背中にして、彼の馬は、防禦線から五六町も後ろに後れて、そのまゝ立止つて了つた。彼の側に馬を進めてゐた大隊の檢察官は、カラウロフの馬の手綱を摑んだ。

（老人は少し眠らして置いてやらう。）

だが、カラウロフは直ぐギョッとして目を覺し、鐙の中に立上り乍ら、鋭い眼付きであたりを見廻した。そして緊張し切つた耳を町の方に傾けた。彼には直ぐそのあたりの地形が解つた。町の灯も、河も、谷も、……

そこへ大隊長が馬を進めてやつて來た。そして私語くやうに報告した。

『斥候が歸つて來ての報告に依りますと、何んでも町外れの所迄行つたのださうですが、無數の敵が我軍に向つて進軍しつゝあると云ふ事です。で、我々は暫くここで奴等を待ち伏せてゐる方が得策だと思ひますが。ここの地の利は非常に都合良いと思ひます。』

カラウロフは默つて頷いた。

『銃火は頻りと驛の方から聞えて來ます。』

大隊長は云ひ續ける。

『味方の者があすこにもゐるのです。連絡をつける爲に、私は二三遣したのですが、しかし、いまだに誰も戻つて來ません。』

『よろしい。同志大隊長！』

カラウロフは口を切つた。

『おい、ダニロフ！　お前、ここに殘つててくれ、俺達はちよつと手配りを調べやう。』

彼等はほんの二三歩乘り出した。と前方を、刻々に大きくなつて行く一人の騎兵の影が近着

いて來た。馬の蹄は雪の道の上に鈍い音を立ててゐた。

『又斥候のもんだ。』

大隊長が云つた。

三人は並んで立つてゐた。向ふから見ると、赤兵の眼には何か一つの空想的な、潭山の頭を持つた得體の知れない塊りが見えた。——忽ち三つの頭は消え失せた。そこにはたゞ馬の輪廓だけが見えてゐた。騎者は下馬をしたのであつた。

『伏せ！』

全線に亘つて響いて行つた。

『狙へ！』

そしてその命令がまだ左翼の方に傳はり切らない內に、既に右翼の方では機關銃の音が激しく鳴り始めた。——ガタ〳〵〳〵、……それは續けさまに響いて行つた。お互ひに追ひ越すやうに、急速に、次から次へと輕い彈丸が飛んで行つた。

策戰の進行に關して、カラウロフは殆ど口を出さなかつた。大隊長の所置に對しては、全て彼

は満足げに頷いてゐるだけであつた。明けかけた朝の薄明りの中に、彼は、大隊長の剃刀も當てた事のない剛髯だらけの顔を見た。固く結ばれた唇を見た。そしてカラウロフのその男に對する態度は、益々叮嚀になつて行つた。聲の調子は段々親切になつて行つた。たつた一遍、彼はこのセレツキーの命令を變更した。——彼は町外れの民家に向けて機關銃を發射する事を禁じた。

『でも、あなた、あの家の中からも、こちらへ發射する奴があるんですよ。』

セレツキーはびつくりして訊き返した。

『同じ事だ。いけないと云つたらいけない。……住民に害を加へるやうな事になるからな。』

カラウロフは答へた。

第一の中隊は徐々とバラ〳〵に町に向つて前進して行つた。このあたりは一帶に見晴せて、窪地を作つてゐた。疎らな殘雪は重い兵隊靴の下にくづれた。薄青い雪の平地の上に、灰色の小さい姿は、それこそお誂え向きの目標を作つてゐた。

徐々と進軍して行く内に、多勢、死んだり傷いたりして減つて行つた。

スピチィンが青白い朝霧を通して、家並や籬に沿ふた小高い丘の上に、遠く敵の前哨線を認めた頃、空の一方の枠はもう燃えるやうな薔薇色に染まつて、紅い朝日が今にもあの波のやうにうねつた遠い地平線上に上らうとしてゐた。彼はもう何んにも考へてゐなかつた。直ぐと藥包が出易いやうに彈藥盒を結い變へた。素速つこく狙ひをつけては引金を引いた。銃はその度に、まるで生きてでもゐるやうに、彼の力強い手の中で飛び上つた。彼は屈み乍ら、次の匿れ場所へ走つて行つて、又跪いて狙ひをつけた。一發響き渡る。

フィディインはもうその時、左の肩に傷を受けてゐた。骨には達してゐなかつた。彼は立止つた。スピチィンは默つて繃帶をしてやつた。そして兩人は又並び合つて、匿れ場所を次から次へと移つて行つた。そして向ふに見える小さい家並や、籬に向けて、白い煙りと、目に見えない殺人の彈丸を送つた。

ダニロフは平和の時に、戰爭とか、合戰とか云ふ事を全然考へてゐなかつた。彼は生を享樂して生活して來た。大會で饒舌つたり、町へ來て政治部へ這入つてからも、たゞマルチィノフあた

りとくだらない事を議論し合ふ位がやまだつた。誘はれれば、清飲素とより辭せず、美妓ます〳〵可、と云ふ風であつた。そこへ戰爭が起る。ずる〳〵とダニロフも捲き込まれて了ふ。それもセレツキーのやうに、策戰の首腦になると云ふわけではなく、普通一般の兵士達と同じやうに引つぱり出されて、接戰があるといつでも第一線に立たせられた。赤兵達は遠くの方から、光澤の良い革の上着と、檢察官の眞赤なズボンを見た。

今度もさうであつた。彼は頻りとカラウロフやセレツキーに向つて、繰り返し〳〵賴んで見た。

『ねえ、私に一中隊ばかり借してくれませんか。奴等の眞只中に暴れこんで行つて見せますが。どうでせう？……』

大隊長は肩をゆすぶつて脇を向いて了ふ。カラウロフは口數少く、しかし激しく叱りつけた。

ダニロフはぷり〳〵怒つて、第一中隊の方へ、彼の非常に尊敬してゐる友達のスピチィンを探しに行つた。自分に加へられた屈辱の苦情の排け口に、頻りと何んにでも嘲笑した。

彼は防禦線の後ろから從いて行つた。そして時々、家並の間に小さい姿を見付け出しては、手

に持つた拳銃で射擊した。彼は氣嫌よく赤兵達に挨拶した。そして第一中隊の側面に近寄り乍ら、もう遠くの方からスピチィンの屈んだ姿を認めた。彼は呼びかけやうとした。丁度その時彼の眼には、町外れの近い家々の方から、こつちへ向けて大急ぎで近寄つて來る、黑い一點がうつつた。彼は鋭く眼を見張つて、そして立止つた。二三發の彈丸が彼の頭を掠めて飛び去つた。だが、そんな事にはてんでお構ひなしに、彼は急に大聲に叫んだ。

『同志！ 女が一人駈けて來るぞ。氣を付けて射てよ。』

もう皆はとつくに彼女を見てゐた。彼女の毛髮は風に靡いた。彼女は時々倒れさうになる。絹を裂くやうな叫び聲を上げる。そして又まつしぐらに走つて來た。彼女の後を追ふやうに、敵の防禦線から霰の如く彈丸が浴びせかけられた。すると忽ち、若々しい朗らかなフィディンの聲が、味方の防禦線を通じて響き渡つた。

『おい、皆んな！ ありや俺達の先生ぢやないか、え？ 同志グラツチョーワだ！』

他の連中も、もう彼女を認めた。

『さうだ、さうだ。先生だ。……』

ダニロフは拳銃を手にしたまゝ、前哨線の前方に進み出た。

『同志！　さあ、先生を救ひ出さう。進め！　あの人を迎へろ！』

『屈みなさい。同志グラツチョーワ！　雪の上へ横におなりなさい。』

フィディンは彼女に向つて叫んだ。

リザには、初めのうち、何を皆んなが叫んでゐるのか、さつぱり解らなかつた。だが、防禦線が段々近着いて來るに従れ、不安もいくらか消えたものと見え、見知り越しの顔もチラ〳〵と解つて來た。――もう皆んなの云つてゐる言葉も解つた。

あすこに皆んなはゐる。懐しい親しい顔！　學校で彼女が九々を教えてやつたあの同じ人々が、今あすこに彼女の目の前に現れてゐる。恐しい銃で身を固め、まるで曾つて彼女が一遍行つた事のある、あのいかめしい刑事裁判所そのまゝのやうに、――勝ち誇る正義の力として彼女の目の前に立つてゐるのだ。彼女は雪の上に突つ伏した。

『どうして、あんた、こつちへやつて來たんです？――』

彼女は鋭い聲を耳にした。彼女は心持頭をもちやげて、上の方に凉しさうに澄み切つた青空

を見上げた。鈍い光を放つた赤い太陽が丘の上にかゝつてゐた。その直ぐ脇に、――小つぽけな灰色の家の群。彼女は無數の銃聲を聞いた。それに混つて機關銃の單調な爆聲。そして直ぐ眼の前に、黒茶けた地肌と白い殘雪を背景として、――土色の、まるで血の氣のないやうな顔、濃い眉毛、皺だらけな頬、それから縮れたチョビ髯、彼女は旅團長のカラウロフの顔を見た。彼はもう以前のやうに恐ろしくは見えなかつた。泣き乍ら彼女は、この一夜の經驗を殘らず語り始めた。

カラウロフは、ロベイコの死に關する詳細な話を、默つて熱心に聽いてゐた。シンコワの死體の有樣も、リザは報告した。今でもまだ、それはあすこに、……あすこの灰色の籬のほとりに、つめた　横たはつてゐるのでせう。彼女はさう云つて悲しげに眼をやつた。

カラウロフの顔は茫然として身動き一つしなかつた。たゞ頬の上の筋肉の一部分が、ぴくぴくとちよつと痙攣してゐた。

彼女のこの漫然たる話の途中へ、大隊長がやつて來た。驛との連絡がついた事、同志ゴルニイチが、共産黨中隊出の十五人ばかりの鐵道從業員を引き連れて、驛を占領してゐると云ふ事を報告した。

カラウロフはいきなり、短い文句で、きつぱりと命令した。

『ダニロフ！　行け！　さあ、突擊は今だ！　今こそ許してやる。奴等を片つ端からやつつけろ！　犬つころ共奴を。左翼から始めろ！……セレツキー！　機關銃を街へ向けてぶつぱなせ。家を擊ち壞せ。……捕虜なんか生ぬるいものはつくるな。……』

そして、この命令にもう喜び勇んでゐるダニロフの腕を引つ掴んで、暫くしつかりと抑えたまんま、その耳元へ、私語いた。

『お前、聞いたか？　奴等はロベイコを殺したんだ。町を占領したら俺や直ぐ醉つ拂ふぞ。ぐでん〳〵に銘酊するんだ。酒、酒だ。……さあ、今だぞ、進め！』

一三

小豆色に霞んだ野山のあなたを越えて、灰色の町の蔓を撫でるやうに、低く、重く掩ひかぶさつた濕つぽい雲の塊りが、ゆつたりと靜かに動いて行つた。そこからは銀色の細い霧雨を降らしてゐた。內氣に、降るとも見えず、しかも惠み多い雨の絲。それは若人の最初の戀の抱擁を

想はせた、露はな女の肌に初めて觸れた、あの甘くも遣る瀨ない、戰くやうな陶醉は想はせた。やがて、遠山は暈繪ぼかしに霞んで行つた。——霧雨がそれを包んで了つたのだ。掩ひかぶさるやうな低い雲空の下に、この世の中が小さく窄められて行つた。空氣は、まるで溫室の硝子天井の下のやうに、溫く香りを含んでゐた。

氣紛れに、行先きも定めず吹いて行く、輕い物憂い春の微風に運ばれて、野山に溢れるあの枯れ果てゝ行く古い生命の名殘りと、又萠え出づる新しい生命の醉はすやうな香りが、町の方へと漂ふて行つた。そして又町の方からは、騷々しく物を敲く音やら、笛の音、響き渡るもろ〳〵の物音、鐘の音等が雜然としてその微風に乘つて、今度は野山の方へと運ばれて行つた。

コンスタンチン・ペトロウキツチはしんみりと、心の底からその一つ〳〵を感じた。彼は今、砂丘の上に立上つた。——あすこに一つ、ぽつねんと淋しげに立つてゐる、馬鹿に大きい石塊が見える。——家並や、籬や、敎會の混然たる景色を見下した。幼いさい時から、もう厭やになる程見飽きて來た、それこそ露路の隅々迄知りつくしてゐるこの靜かな小つぽけな町の姿が、今日は又彼にとつて、何んとなく幽靈でも見てゐるやうな、幻のやうに見えたのであつた。古

い寒冷紗の上に、色褪せた絲で縫ひものでもされてゐるやうな感じであつた。

誰か強い勇しい男が飛び出して來て、この寒冷紗を永しなえに引き破つて了ふのだらう。そしてその下に陰されてゐた、新しき生の玉蟲色の光を露はすのだ。コンスタンチン・ペトロウキッチには何んとなく他事々々しく親しみ惡いあの色合ひ。そして彼には理解し難き新しい美の姿を展開させるのだ。丁度年老つた蛇のやうに、この人の世の生活は、今、苦惱と悶えの中に、もう一遍その皮を脱ぎ變へるのだ。古い色褪めた皺だらけな舊皮を、惜し氣もなく脱ぎすてゝ、その下に、新生のまだ見た事もない、光彩に輝くやうな斑點を現はすのだ。そして今、霖雨に垂れこめた灰色の畫面の中に見えるこの町の景色は、そしてあすこに見えるあの、――サーカスの建物の上に高く飜へる赤旗や、それからそこの廣場の藥局の眞紅な看板は、多分その同じ輝く斑點ではないのだらうか？

コンスタンチン・ペトロウキッチは過ぎし日の露西亞の人々の生活を想つてゐた。この不安に滿ちた霧深い野山を背景として、灰色の小町の中に、無數に散在した在方の村々の上に過ぎ去つたあの生活を想つて見た。プーシキンだのツルゲニエフだのチェホフだの、……その

他多勢の露西亞の作者達が、この永遠に過ぎ去つて了つた有りし日の生活の上に、熱い涙を注ぎ乍ら、あんなにも忠實に描き出したあの過去の生活を彼は想つた。曾つては彼コンスタンチン・ペトロウキッチも、これ等の作者に全く魅せられて了つた事もあつたのだ。

二十年と云ふ永い年月、彼はこの町にある二つの中學校で、露西亞文學を講義してゐた。この二十年の永い間、彼は小つぽけな書齋の二つの本箱にぎつしりと詰まつた、あの綺麗に裝幀された小冊子を讀んで來たのだ。所が革命以來と云ふもの、その數が目に見えて減つて行つた。彼の妻でもあり、又女中代りでもあるマルガリタ・セムヨノウナと云ふ、彼より年嵩の女が、その本を一つ〳〵肉だの、麥粉だの、パン粉だの、卵だのに換へて行つて了つたのだ。

仕方のない事だ。何よりも先づ生きて行かなければならない！　サキエートの學校へはどうしても教えに行きたくはない。――『主義として』と彼は云つてゐる。――手藝と云ふやうなものは何も手に持つてゐない。それに貯金は瞬く間に食ひ潰されて了つた。來週こそは、來月にでもなつたら、年が明けたらと云つた工合に、革命中、彼はこの祖國の上にのしかゝつてゐる、血醒い、忌々しい、得態の知れないボルシェビストの勢力が、一刻も早く崩壞して了つて、

あの昔の眞實の生活が再びめぐつて來れば良いのだが、と、毎日々々、たつた一つの希望を胸におさめて、彼は暮して來たのであつた。

あの十月革命の物すごい大波がなだれかかつて來た頃から、彼はボルシェビストを嫌つてゐた。彼にとつて彼等は全く他事ごとであつた。彼の今迄の生活には、てんでそんなものは存在しなかつたのだ。奴等の行動や、辯說は、徹頭徹尾わけの解らぬ矛盾だらけな代ものであつた。ボルシェビストは、彼の眼には、野卑で殘忍で、同時にサタンのやうに猾す辛いものに見えてゐた。嘘つ八ばかり吐いてゐるあのジェスウキット敎のやうな奴等であり、同時に又偏見固陋の煽動家にしか見えなかつた。

彼はとても平氣でサキエートの章を見てゐる事が出來なかつた。胸糞が惡かつた。だから彼は殆ど家の外へ足を出した事がなかつた。晝間でさへ彼は鎧戸をほんの少し開けるきりであつた。彼は階下へ下りて來て、濁酒をあふり乍ら、マルガリタ・セムヨノウナに當り散らして、終日獨骨牌をやつてゐるか、さうでなければ、ソフアの上に寢そべつて、見る影もなく貧弱になつて了つた書架から、手當り次第に本を取り出しては、讀んだり居睡りをしたりして、一日の

らくらと暮してゐるのであつた。

舊態に復せば良いがなあ、と云ふ彼のたつた一つの望みの綱は、あのチェツク・スロバキヤの革命で全く斷たれて了つた。彼はあの當時幅を利かしてゐたブルヂョア達の、いろ〳〵の不正とか、竊盜とか、賄賂行爲とか云ふものを散々見てゐた。彼は又白衛軍の士官連の横暴や、無智な事や、お話しにならぬ不人情な點を見てもゐた。しかし彼は輕蔑し乍らも、彼等を憐んでゐた。丁度飲んだくれで、のらくら者で、親父の希望を情けなくも裏切つて了ふ、始末に負へない道樂息子に對する父親のやうな氣持を、彼は彼等に對して懷いてゐた。

今や彼には、この地球上の人間の生活と云ふものが、非常に無意味なものに思はれてならなかつた。この全人類の滅亡を云つたやうな、嫌人的な夢に屢々彼は襲はれた。

暴動の起つた日、伐木作業に引つ張り出された町の人々の間には、何んと云ふ事もなく曖昧な風評が傳つて行つた。夜に這入つて彼等が一々嚴重に頭數を調べられた後、大きな暗い部屋の中に閉ぢ込められた時、そして廣庭の方から何んとなく騷々しい太鼓の轟きが響いて來た時、

忽ち彼等の間には、憤怒と、恐怖と、喜びと、心配が混然として突發した。

部屋の中は笑ひと叫び聲と、そして忌々しさうな耳語に滿たされた。そこへカラウロフが自身這入つて來た。彼のうしろに從つて、二人の男がかしこまつて默つて從いて來た。彼は懐中電燈の光を、靜かになつた人々の群にさし向けた。その仄のかな光の中に、彼は皆んなの顏に浮んだ種々雜多な表情を見た。そこには老人もゐた。若いものもゐた。綺麗な顏もあつた。醜いのも勿論あつた。悧巧な顏付も見えた。馬鹿のやうなのもゐた。この樣々な顏の上には、他人の困苦を見て喜ぶ皮肉な嘲笑も浮んでゐた。希望に滿ちた表情。恐怖におびえた顏色。

カラウロフは直ちに事態を見て取つた。彼は大聲ではないが、皆んなに聞えるやうに、第三中隊長のシュルビンに向つて命令した。その男は、半中隊の兵士と共に、ここに止つて、僧院を防禦する役目を委ねられてゐた。色の淺黑い、キビ〳〵とした、少し藪睨みの若者であつた。

カラウロフは云つた。

『ちよつとでも變な眞似する奴があつたらな、……構はないからどし〳〵かたをつけてくれ、良いか？　解つたか？』

『承知しました。同志指揮官！』

シュルビンは答へた。そして藪睨みの眼差しをカラウロフの方へ投げかけて、ちよつと齒を剝き出して笑つた。それからその見當違ひの眼で、ぢろつと、靜まり返つてゐる町の人々の群を睨んだ。皆んなの眼には、その瞬間、彼がまるで地獄の鬼のやうに思はれた。——がつしりとしたその姿。藪睨みの殘忍性を帶びた奇妙に綺麗な眼。陰鬱な顏。軍帽に着いてゐる、サタンを想はすやうな角が、彼等に限りない恐怖の感を懷かせた。

永い不安の一夜は更けて行つた。

このがらんとした、閉め切つた鬱陶しい部屋の中では、誰一人として眠らうとするものはなかつた。あちらこちらでこそ〳〵と私語が聞える。コンムユニストの事を、片つ端から、洗ひざらい嗤笑し盡して、彼等の缺點を根掘りし葉掘り數へ立ててゐた。そして最後に、たゞ神に祈つて、祈つて、祈つた。

コンスタンチン・ペトロウキッチも眠れなかつた。外套に身をくるんで、彼は固い狹苦しい

腰掛の上に横になつてゐた。時々寢返りを打ち乍ら考へてゐた。彼はこの暴動が成功するとは考へられなかつた。そして又それに對して心からの同情も持てなかつた。——彼はあのチェツク・スロバキヤの暴動當時の事や、又あのコルチヤツクの事を餘りにはつきりと覺えてゐた。さうかと云つてコンムユニストは彼にとつて、昔乍らに、親しむ氣にはなれなかつた。あの赤旗の上に書かれた文字を、そのまゝ受入れる事は出來なかつた。あの一語の爲に彼等は從容として死んで行くのだ。彼はここでちよつと考へた。あんなに澤山の民衆が、勞働者とか、赤衛軍の者達とかが、——それは多く兵士の外套を着た百姓の若者連だ。——兎も角も數年に亘つて、あの半分以上も露西亞宗派以外の者で作られてゐる、インターナショナールや革命家の手先となつて、夢中に心醉してゐる所を見ると、ことによると彼等の生み出した生活信條の中にも、何か知らんの眞理が含まれてゐるのかも知れない。兎に角一遍彼等ボルシエビストと一緒に働いて見るのも良い事かも知れない。さうしたら多分彼等の眞理を認めてやる事が出來るのかも知れない。——少くとも、一日、ソファの上に寢そべつて、しやれた裝幀の小說に讀み耽つて、そして、たゞのらくらと居食ひしてゐるその閑暇に。——ほんとにさうだ、亡び逝く舊生活の葬

式に出されたまづい饗應だ。

彼の考へがこんな所へ漂つて行つた時、丁度第一中隊の連中が僧院へ歸つて來て、暴動がもう鎭定されたと云ふ事が知れ渡つた。

コンスタンチン・ペトロウキツチは指揮官のシユルビンに一日の休暇を願ひ出た。ぼろ〳〵になつた靴を變へても來たかつたし、それに、——こつそりと文部省へ出頭して、何か職を求めて來やうと決心したのだ。

彼の全生涯を吸ひ盡し、もう厭やになる程見飽きて了つた、それこそ露路の隅の隅迄知りぬいてゐるこの町を、彼は今、全く新しい眼で見るやうな氣がした。あのマルガリタ・セムヨノウナを、彼は一日だつて愛して來た事もなければ、それにもうとつくに厭氣がさしてゐたのには違ひなかつた。が、それでも彼にとつて、ついに彼女はこの地球上にたつた一人の伴侶だつたのだ。

——そして彼はこの二三日彼女に會はなかつた。

曙朝、まだ夜も明け切らないうちから、コンスタンチン・ペトロウキツチは、町へ材木を運ぶ荷馬車の脇について、霧のやうな小雨の中をとぼ〳〵と歩いて行つた。

彼はぼんやりと、荷馬車の持主や、百姓や、それからこの輸送に從きそつて來てゐる赤兵達の會話に耳を傾けてゐた。種子の事、もう始める時だとか、ボルシエビストの異敎徒が、この惡い路に材木を運ばせやがるだとか、種蒔きの種子がありやしないとか、あのペテン師のコンムユニストの奴、取り上げた穀物の代りに品物を寄こすなんかんとうまい事をぬかし居つて、その實、鐵器、家具、布地はもとより、釘一本寄こしやがらないで、糊ばつた肌衣のカラや、安白粉や、唇軟膏を寄こしやがつた、とか、とか、とか。

『ウン、糞忌々しいあの異敎徒奴！』

一人の百姓が云つた。……

『そいつあ、誰か中間の奴が故意にやつてる仕事なんだよ。』

一人の赤兵が當惑さうに答へた。

『斷然、特命委員會にそ云はなくちや、……』

百姓は頼りなげに手を振つた。

『特命だらうが、杢兵衛だらうが、何んになるもんけえ。あつちにもこつちにもコンムユニス

トがごろ〳〵してけつかりやがる。ぎし〳〵芋でも洗ふやうにさ。』

もう一人の赤兵は百姓達に向つて頻りと説明してやつた。

『今お前達が町へ運んでゐるこの薪木は、鐵道へ納めるんだ。さうすると鐵道がお前達に種子を運んで來てくれる。……それでお前達も種蒔きが出來ると云ふわけさ。スピチィンがさう云つてた。政治の方の首領さ。良い同志だ。……それに俺あ新聞でもさう讀んだ。……』

『暴動を起しやがつたり、俺達の邪魔をして、經濟の復興事業に横槍を入れたりするやうな奴等は、そいつらあ俺達の敵だ。』

彼は聲の中にすごい位の敵意を含んでさう云つた。

『例へ血をわけた兄弟だらうと、何んだらうと、そんな暴徒なんかになりやがつたら、俺あ容赦はせんぞ。』

『俺がにはよく解らんのだがね。』

もう白髪になつた髯を生やした、白眼がかつた、よぼ〳〵の老ひぼれ百姓がさう云つた。

『だが、何んだか俺がにや、あの天に在しますマリヤ樣、守り神樣のおたすけがなけりや、も

うこのまゝ飢えてくたばつちまふやうな、そんな氣がしてなんねえだ。」

そして丁度丘の上から見下される町立教會の鍍金の金の十字架を見やり乍ら、彼は毛皮帽を禿げ頭からとつて十字を切つた。するとその例に見ならつて、他の百姓達もあとから〳〵と十字を切つた。丁度その教會堂からは、鐘の音が惱ましげな響を傳へて響いて來たのであつた。

「ぼろ〳〵になつた以前の文部省時代の制服の外套を着て、今は年老つて皺だらけではあるが、それでも以前は相當綺麗であつたらしい、キチンと髯を剃つた顏を風に吹かせて、コンスタンチン・ペトロウキツチもその時、手早い目立たないやうな動作で、そつと十字を切つた。彼はこの薄汚い無知な百姓共を見た。それからこの色彩のないぼやけたやうな小町を見た。小豆色をした野山の果てを見た。そしてこの霧深い陰氣な日の中に、彼の心は死んで行く昔のあとを想つて慟哭した。悲しげに翼を垂れて、町の上を巡つて行くやうに響き渡るあの鐘の音に調子を合せて、彼の心は淋しく波打つた。彼は泣いた。——幾重にも雲に包まれ、ぼうつとほの明るくそこと解る太陽の在所も、とつくに子午線の上にかかつて、そして薄い虹の半圓を小豆色の野山の果てに投げかけてゐる。明るいやうな暗いやうな、單調な、退屈な、今頃の時刻は彼の心

を益々重くした。……

十字を切つてゐる百姓達の姿を見て、赤兵共の顏は妙に曇つて行つた。とう〳〵終ひに、一番年若の一人が馬鹿にしたやうな調子で呶鳴つた。

『善哉、〻〻。ごたくが濟んだら、さあ、出掛けやう。……え〻と、……何んとかさん、お前さんも愚圖〻〻しずに、さあ、早く歩いた〳〵。』

彼はコンスタンチン・ペトロウキツチの方を振り向いた。

そして又のそ〳〵と荷馬車の長い列が動き出した。

コンスタンチン・ペトロウキツチは、大廣場を横切つて多勢の人々が、町の四方から、どんどんサーカス小屋の方へ集つて行くのを見た。二三人かたまつて行くのもあつた。一人つきりで歩いて行くのもあつた。若い男も老人も、男も女も、いろ〳〵の違つた顏付き、身振り、歩きつき、——それでもどこか知らに、皆んなの間を貫いて、或る共通した氣持が漂ふてゐた。いろ〳〵の違つた世界を、人を、一樣にあの遠い朝日が照らすやうに。コンスタンチンはコンムユニストの集會が開かれてゐるのだと云ふ事を直ぐ悟つた。

それは暴動の濟んだ後の最初の黨會であつた。殺氣立つてゐる彼等の耳には、平和な鐘の音も、敵の吹き鳴らす喇叭を聞く思ひがした。まだ戰ひは終つてはゐないのだ、敵は一時退却したゞけの話なのだ、まだ完全に打ち負かされてはゐないのだぞ、と、面と向つて警告されてゐるやうにも取れた。この警めの響は彼等の顏に暗い陰影を投げかけた。だが、彼等は現在の勝利の事を考へた。暴動は兎に角鎭定されたのだ。彼等はお互ひに喜ばしい感情と希望とを分ち合つた。

リザ・グラツチョーワもおづ〳〵とし乍ら、他の人の間に混つて歩いて行つた。彼女はサーカス小屋の入口の所迄やつて來た。だが、いざ中へ這入ると云ふ段になつて、ちよつと氣が負けた。

彼女は多勢の人の群の中に、見知り越しの顏を物色したが、中々見當らなかつた。昨夜來の暴動で、皆んな殺されて了つたかのやうであつた。……

そこへ一人、ピカ〳〵の金釦のこさつぱりとした外套を着て、胸にコンムユニストの星をつけた男がやつて來た。……それは政治部の書記の同志マツセンコであつた。……彼はポ

ケツトから綺麗な黨員證を取り出して、それを、サーカスの入口に腰をかけて、入場者を一人々々記名してゐる、若い陰氣な眼付きの地方委員會の書記に見せた。……

『同志マツセンコ！　同志マツセンコ！　……あなたまあ、無事に生き殘つてたのね！　まあよかつたわねえ、殺されずに濟んで、ほんとよ！』

同志マツセンコはいかにも滿足げに微笑んだ。

『私を殺すつて？　どうしてです、え？　私なんか小つぽけな、ほんの詰らない男ですもの。それに近所隣りに一人だつて敵を持つてやしません。鐵砲の擊ちつこさへ、てんで聞かなかつた位のもんです。ほんとにちよつとも、……私達は良い心持で、ぐつすりと寢床の中で寢てたんです。すると夜中に妻が眼を覺してから云ふんです。『イリユシヤ！　何んだか鐵砲の音がするやうだわ。……』つてね。で、私は云つてやつた。『何んだよ、グルシヤ！　夢なんか見て寢呆けてさ、え？』所が朝になつて今度は私が聞いたんです。——今度は眞實にはつきりとね。——ええ、鐵砲の音がするんです！　そこで私あ無茶打ちが終る迄、家に殘つてました。それから仕事に出掛けたんです。政治部には私の他に、誰あれも居ないぢやありませんか。だ

が、私はこれでも自分の義務と云ふ奴をわきまへてゐますからな。……』
『でもこれから先き、一體どうするんでせうね、同志マツセンコ！　シンコワもマルチイノフも皆んな死んで了つたのね、……』
マツセンコの顏にはチラツと悲しげな苦悶の陰影がさした。
『私もたつた獨りになつちやつた。ほんとに獨りぼつちにねえ。……この國の民衆は、何んて無知で亂暴なんだらう。……ですが、あなた、あなたも我々の黨に加入なさるんですか？』
彼は勞るやうにリザに訊いた。
『あなたもこの集會においでになるんでせう？』
夕べの禱りに人を呼ぶ鐘の音を、リザはその時聞いた。彼女は敎會へも行かずに、黨の集會へやつて來た自分の事を考へてゐた。……そして、もう、……これからも決して敎會の門は潛りはしないのだらう。……復活祭にだつて行きはすまい。何故ならば、……もうこの世の中に、神なんて云ふものは存在しないのだもの。……
こんな新しい考へに耽りつゝ、彼女はぼんやりと答へた。

『私は今、同志カラウロフを待つてゐる所なのよ、……ここでお會ひする約束をしたの。』
そこへ丁度當のカラウロフが馬でやつて來た。彼は素ばしつこく飛び下りて、馬をそこへ繫いだ。遠くの方迄續いてゐる國道の上に、頻りと目をやつて、そこに長く續いて行く材木荷馬車の黑い隊列を見た。
すると誰か、不意に肩の所へ重く手を掛ける者があつた。振り返つた拍子に彼はゴルニイチを見た。キリつと結んだ唇、大きな穩やかな顏の上には、輕い疲勞の色が浮んでゐた。
『薪木だ！』
道の方を指さし乍ら、ゴルニイチが短く云つた。
『薪木だ！』
カラウロフも鸚鵡返しにさう云つた。そして兩人は口を噤んだ。——兩人とも、特命委員會の廣庭に、赤い旗に包まれた柩の中に横たはつて、これから盛大な葬儀を待つてゐる、彼等の悲しい廿八人の同志の事を考へてゐた。
『可哀さうな事をしたな。』

カラウロフは短く云つた。

『まるで犬死をしたのだ。俺達の言つた通りだつたな、お前と俺とがさ。大隊はやつぱりこの町を離れちやいけなかつたんだ。』

ゴルニィチは暫く默つてゐた。そして丁度重い切石を、固い垣の中にでも打ちこむやうに、考へ深さうに、重々しく口を切つた。

『いいや、カラウロフ！　僕達こそ考へ違ひをしてゐたんですよ。あすこに行く荷馬車を見給へ。まあ考へて見るが良い。』

彼はいつもに似合はず、生き〳〵と、元氣に附け加へた。

『あすこへ行く木が、やがては我々に穀物を齎す。穀物が出來ると云ふ事は、この百姓一揆に對して、丁度火に水を注ぐやうな働きをするんだ！　我々の同志は決して犬死をしてやしない。……僕は今いろ〳〵と取調べをやつて來たんですが、この暴動は、晩かれ早かれ、どうせ避け難いものだつたんですよ。……』

そしてゴルニィチは掻い摘んで、取調べの經過を報告した。

この町が占領されたのはたつた昨日の事だつた。昨日はまだ、街路の上で銃聲が頻りと鳴り響いてゐた。それだのに、今はこの小つぽけな家の並びは、まるで世界中で一番平和な穩やかなもののやうにおさまり返つてゐる。

だが、ゴルニィチは知つてゐた。昨日、街の上に漲つたあの激しい熱情は、この小さい家々の奥の奥迄滲みこんでゐる。彼は又新しい突發を恐れた。そしてそれを未前に防がうとした。この危惧のお蔭で、クリーミンの死體を見た時、不意に襲つて來たあの嗚咽を、危ふくも彼は忽ち抑えつける事が出來たのだ。一日中ぶつ通しの見張番と、過度の神經の緊張で、胸の底からこみ上げて來たあの嗚咽を、彼は食ひ止めたのだ。役目の順から云へば、特命委員會の他の殘つた仲間の中で、最年長と云ふわけでもない彼が、暴動後の取調べの指揮を、一切自分に引き受けたのも、皆んなこの恐迫觀念がさせたのであつた。すると、特命委員會のあらゆる活動の指揮が、又どうした事か、自然に彼の手に落ちて來た。

暴徒の中で逃げ終うせた者は、ほんの數へる程しかなかつた。共產黨中隊を占領しやうとし

た時負傷した赤毛の百姓は俘虜になつた。

ゴルニイチは彼を他の暴徒に向はして立たした。——町で捕つた近在の百姓どもにつき合せた。

彼等はまるで、ひどい泥酔から醒めたあとのやうに元氣なく、頭を項垂れて、ぺコ〳〵したり、おづ〳〵したりしてゐた。

その赤毛の男は、今度の暴動の主魁の一人だと云ふ事が直ぐ解つた。銃殺の日取りも、時間も豫め決定して置いて、さてゴルニイチは、——今になつて特赦をほのめかしたり、或ひは威したり賺したり、根氣よく、かう云ふ尋問にお定まりのあらゆる詭計を應用して、根掘り葉掘り訊いたのであつた。その赤毛の男は、何んだか、かう叮嚀な穏やかなサタンの手にでも落ちてゐるやうな氣がする事があつた。いや、それよりもつと適切な例をとれば、——生き乍らブー〳〵鳴いてゐる豚を、見てゐる間に、つめたい腸詰の山に變へて了ふ、あの精密なアメリカの機械の口にでも這入つたやうな氣持がした。

ゴルニイチは自身尋問しない時は、默つて豫審判事の部屋をあちこち歩いて見たり、又それ

から尋問を續けたり、記錄を讀んだり、さうかと思ふと、又自分の事務室へ這入りこんだりしてゐた。彼はその部屋に閉ぢ籠つて、長い毛髪の垂れた頭を兩手に支へて、脇で見てゐると、ぼかんとして、一枚の紙の上を凝視めてゐた。そして、時々、ゆつくりと一語か二語を書きつけたりした。

こんな事をしてゐる内に、暴動の經過は逐一と段々はつきりして來た。彼はもう殆ど漏れなく、その全圖面を頭の中に描く事が出來るやうになつた。だから、彼は今、カラウロフに訊かれるまゝに、その數時間に亘つた厄介な取調べの結果、知り得た暴動の顚末を、簡單に二言三言で述べる事が出來た。

急にカラウロフが口を出した。

『まあ、見ろよ。あすこに娘さんが立つてゐるだらう。あれは先生だ。今度の暴動ぢや中々いろんな目に遇つたんだ。ロベイコの死に就いても、何か話してくれるだらうよ。俺はその爲に、今日の集會へ來てくれるやうに云つて置いたのだ。あすこの入口の所に立つてゐる、ね、見えるだらう?……同志グラツチヨーワ! ちよつと、こつちへ!』

ゴルニイチは女の蒼白い顔を見た。薄い金髪の光澤のある毛が、頭の上に垂れかかつてゐた。碧い臆病さうな眼、そして彼は彼女の震へ聲を聞いた。

『妾、あの、少しばかり、報告を致したいと思ひますの。……同志ロベイコの死に就いてなのですが、妾は丁度現場に居合せましたもんで、……妾達は同じ家に住んで居りました。そしてそこで、……』

彼女はぽつり〳〵と語り始めた。――リエビンがその家へ來た時の事から、あの親切さうに振舞つて、しかも狡猾な男のいろ〳〵の行ひの事。セナトール夫妻の事。彼等の態度。暴動の當夜の彼女の彷徨の事。

時々、彼女は不必要な詳細の點迄、くど〳〵と話し出す。するとゴルニイチは、或る一つの定つた明瞭な質問を提出して、彼女の話を自分に必要な方向へ導く。

初めのうちは何んとなくあがつてゐたし、それに頭がこんがらかつてゐて、彼女はうまく話せなかつたり、時々ちぐはぐに縺れて辻褄が合はなかつたりしたが、段々饒舌つて行くうちに、自然に自分の話に釣り込まれて行つた。彼女の聲は段々はつきりとして來た。終ひには抉え目

乍ら、手振り迄するやうになつた。ロベイコの虐殺の件を報告するあたりでは、彼女の瞳には一杯涙が溜つてゐた。

『ねえ、ゴルニイチ！』

やがて二人つきりになつた時、カラウロフは口を切つた。

『俺は今、ぢいつとお前の樣子を見てゐたのだが、ほんとにびつくりして了つたよ。全ての要點をあんなに確實に摑み出す手際なんて、全く不思議な位だ。例えて見れば、今さき落ち着き拂つてあの娘さんから、いろ〳〵の事を巧みに訊ね出した所なんか、全く大したもんだ。

それから、それに、……ねえ、もしお前があの十五人の鐵道從業員と一緒に、あすこに頑張つてゐてくれなかつたなら、きつと暴徒の奴等に驛を占領されたに違ひない。さうすりや、とてもこんな事ぢや濟まされなかつたんだよ。もつと〳〵事態は惡くなつたに違ひない。俺も大隊を連れて、手も足も出せなくなつて了つただらうし、この暴動のおさまりだつて、もう後何ケ月も延びたかも知れんよ。實際だよ。そうして、もつと何人かの同志の命が亡くなつた事だらう。……』

カラウロフは聲を震はして、猶も云ひ續けた。

『お前はまるで、犬か馬のやうに、骨身を吝しまず働いてくれた。何もかも間に合ふやうに手筈して、特命の仕事もすつかり采配を振るつてくれた。材木の供給にも陰乍ら力を添えてくれた。そして新聞に論文迄書いてくれた。……

それだのに俺と來たら、――俺は何一つ働く事が出來なかつた。あの女からロベイコが殺られたつて聞いた時なんさあ、俺の眼の前が眞暗になつて了つたのだ。――俺はまるでけものか何かのやうになつて、この手で暴徒共の頭を打ち破つてやつた。そして、それから又續いて皆んなの死を聞いた。シマンも、スタルマコフも、クリーミンも、……クリーミンとは革命以來、俺あ、ずうつと一緒にやつて來たのだよ。……もう今ぢや俺は不具者も同じこつた。もう手も足も出ない。この町は俺にとつては死滅したのも同樣だ。……老ひぼれと罵るのなら罵つておくれ。だが、俺はお前より三十も年上なんだよ。そいつを忘れないでおくれ、なあ、……

昨夜は醉つぱらつた。胸一杯の忿怒と、自暴自棄でやたらに飲んだよ。醉ひが醒めた時、も

う俺の眼からは、一雫の涙も流れ落ちはしなかつた。だが、今かうやつて眼の前に、お前のやうな有爲な青年を見ると、俺あ無性に饒舌り度くなるんだよ。まるで誰かが來て、俺の心の蓋を開けてくれたやうにな。すると又恥しくなつて來る。そして、それから又おさまる。まあ、氣をつけて見てゐてくれ。お前も今に、一遍はさう云ふ氣持を經驗する時が來る。そしてこの年老つたカラウロフの事を、きつと想ひ浮べる時があるよ。……さうだとも、あゝ、……』

振鈴が旣に鳴らされた。座席の中は段々靜かになつて行つた。顏を赤くして吃り乍ら、この町の地方委員の書記が、出席者に向つて、議長を選出するやうに要求した。……皆んな何んと云つて良いのか解らなかつた。

鈍い、賴りげない呟き聲が座席の中に擴つて行つた。最も有能な、最もやり手な、最も强い人々が、皆んな、あの赤旗に包まれた柩の中に眠つてゐる今日、一體誰を選ばうと云ふのか？誰かゞクリーミンの名を呼んだ。もう一人は漠然と同志シンコワを指名した。……だが、書記はそれ等の名前を書き付けやうとしなかつた。

『同志カラウロフ！』

蚊細い、いやに甘つたるいマツセンコの聲が聞えた。だが、カラウロフは辭退した。……彼は議長を勤める事を知らなかつた。同志達も皆んなそれを知つてゐる。おまけに彼は今日病氣なのだ。……

その時、突然、誰かが上の方から大聲で指名した。

『ゴルニイチ！ ……同志ゴルニイチ！』

すると忽ち、四方から合鎚を打つた。

『さうだ、……ゴルニイチ！……同志ゴルニイチ！……』

『一體誰だ？——ゴルニイチつて？』

二三の人が大聲に訊いた。

すると、再びさつきの力強い同じ聲が、サーカス中に聞え渡るやうに、一番上の座席から響いた。

『ゴルニイチ！ 特命委員會の男だ。……俺達鐵道從業員に警告して、暴徒に向つて指揮をしてくれた人だ。やり手の若者だ。』

生れて初めて、ゴルニイチはこんな大きな會の議長を勤めるのであつた。……彼は暫く途方に暮れてゐた。何んと云つて良いのか、てんで解らなかつた。だが、會衆はもう、まるで馴らされた猛獸のやうにおとなしく、彼の足下にかしこまつて、段々靜かになつて行つた。澤山の瞳を彼の方に、彼等の御主人の方に向けてゐた。

おさだまりの文句の『私は今ここに開會を宣します。』や、議事日程の報告の代りに、——彼の口からはまるで別な言葉が漏れて來た。彼ゴルニイチの固い意志と、そして明快な理性が、この數奇を極めた一週間の間に鍛え上げ、鎔接したその重々しい鋭い言葉は、丁度激しい金鎚の一撃をくつた釘のやうに、聽衆の胸の底に迄、ガンとばかりに打ちこまれて行つた。

彼は暴動の危險が如何に恐ろしいものであるかと云ふ事に就いて話をした。今のコンムユニストは、まるで薄氷の上を踏んで行くやうなものだ。その下には恐ろしい怒濤が渦を卷いてゐる。百姓と云ふ異分子が、奔馬の如く、或ひは鎖を切つた猛獸の如く荒れ廻つてゐるのだ。そして折さへあれば、コンムユニストの仕事を押し流し、ぶち壞してやらうと、鎬を削つて待ち構へてゐるのだ。だからと云つて、それ等の異分子を、たゞ彈丸や銃劍だけで抑へつけやうとするのは不

可であつて、先づ何よりも、町と農村との物品交換を、社會主義の根本原理に從つて、しつかりと確實に組織しなければならないのである。云々。

彼は言葉をあらためて云つた。

『今や我々は非常の秋に遭遇してゐる。同志よ！……中央委員はもう九名しか殘つてはゐない。黨委員はたつた四名である。政治部では首腦が二人ともゐなくなつて了つた。そして特命委員は、――議長も、代理も、それから三人の役員も亦失つて了つたのだ。中央部からは援助を受ける見込みもない。第一そんなものをあてにしてはならない。そこへもつて行つて仕事は益々六ケしくなる一方だ。我々はこれから種蒔きの準備をしてやつて、それを、だゝつぴろい、道もろく〳〵ないこの地方一帶に、漏れなく、充分効果をおさめるやうに實行しなければいけない。

それに、暴徒はまだ根こそぎにされたと云ふわけではない。兎に角、我々は今迄以上の仕事をやつて退けなければならないのだ。例へて見ればこの自分がさうだ。――自分は今、議長の役を引き受けた。それと云ふのは、自分よりも、もつともつとよくこの役目に適してゐる、クリ

ーミンとか、ロベイコとか、シンコワとか云ふやうな人々が、我々の中にもうゐないからなのである。……到る所さうであらう。死んだ人々の役を、我々の肩にしよい込まなければならない。それは決して生易さしい事ではないだらう。だが、我々後に殘つたものが、若し彼等の例に見習つて一致團結、力を協せ、全力を擧げてやつて行つたならば、我々とても、相當立派な仕事を、成就する事が出來得る事と、自分は固く確信するものである。』

そして『インターナショナル』の歌が元氣よく唱はれて、集會が、議事日程に就いて起つたいろ〳〵の質問に移つて行つた頃、ゴルニイチは、丁度熟練した船頭が、舟足の重い傳馬船を、曲りくねつた淺い小川に沿ふて舵を引いて行くやうに、確實に、落着いて、用心深く議事を進行させて行つた。

―― 終り ――

オグリイヅオウオの村芝居

ウヤチエスラウ・シシユコフ

大戰の餘燼も消え落ちて、赤軍の兵卒、パウエル・モーコフは再び生れ故郷のオグリイヅオウオの村へ歸つて來た。

春であつた。滿目は綠に包まれ、花は咲きこぼれてゐた。雲雀は日永空に囀り、夜に入ると夜鶯が歌を唱つた。田畑には肥料が施され、收穫時にはまだ大分間があつた。農夫達は手空きで、いろんなお祭り騷ぎが續いた。——セント・ニコラス祭、復活主日、全聖祭、——人出、鐘の音、宗教的な行列、それから度を外した淫樂、顏と顏とがぶつかるやうな混雜。

「何んて態だ！　まるで野蕃人みたいだ。」

パウエル・モーコフは腹立たしげに考へた。

「鳥のやうに、上から奴等の態を見下してやるが良い。奴等はまるでこの革命の空氣に觸れさへもしないやうだ。恥曝しなこつた！」

そこで彼は早速芝居の會を作つた。

皆んなは、芝居の會なんてものが、どんなもんだかてんから解らなかつた。會員に申込んだ者はほんの數へる程しかなかつた。だが、教會の執事が、惡戯に、誰でも會員になりや餅を貰へると嘘つぱちを云ひ觸らした。と、忽ち村中の者が、それこそよぼ〳〵の年寄り爺さん婆さん迄が、えんさ〳〵と會へ詰めかけた。

會長のパウエル・モーコフは大笑ひして了つた。そして、蟹股のセクレチンヤのお婆さんにかう訊いた。

『よし來た、お婆さん、會員にして上げるがね。そら、お前さんの役があるんですよ。——お前さんは若い戀人の役をやつてくれなくちや。出來るかね？』

『自分でやんなよ。ふんとに、磐臺面の穀壓し！』

老婆は曲つた足をぴよこ〳〵させ乍ら、鼻擘で云つた。

『俺がに、餅を寄こしな、お上の思召し通りにな。三つばかりお寄こし。』

こんな工合で、兎に角、初めの内は大騒ぎであつた。その内に段々目鼻がついて來た。一週間ばかりの内に、陽氣な茶番が學校で演られた。百姓達は大聲に笑ひこけ、卵や、牛乳や、クリー

ムを拂ふから、もつと演つてくれと頼んだ。

パウエル・モーコフは自身舞臺にはとても立てなかつた。——直ぐあがつて了ふし、それに髪へ出して、わけの解らない事をぶつ〳〵云ひ出す。——だが、芝居の好きな事と云つたら、それこそ大變なものであつた。そんな次第で、彼は兵隊達が芝居を演ると、いつでも、舞臺裏で鐵砲を撃つ役目を引受けさせられた。彼はその度に、決してキツカケをとちらずに、正確に音を出した。今度も彼は、ちよつと考へると屁みたいな、それで居て、中々責任のあるこの効果部の役目を引受けた。

所が問題は脚本難であつた。彼等は此の地方の役人へ手紙を書いた。

『ジュリアス・シーザー』の臺本が屆いた。彼等が先づ出て來る人物を勘定すると、たつぷり四十人はかかる。それこそ、村中の若い者に役を振り當てても足りやしない。——ぢや、一體、誰が見物に來るんだらうか？

そこで、パウエル・モーコフと、もう一人の赤兵のステポクキンは、自分達で一つ脚本を書き下さうぢやないかと云ふ事になつた。

『そんな六ケしいこつちやないよ。何、わけないよ。』

彼等は先づ駈け出しの村の教師、ミトリ・ミトリッチを招んで、手傳つて貰ふことにした。此の男は以前、教會で使ふ法衣を作つてゐた洋服屋さんであつた。

晩飯が濟むと、三人は湯氣の立ち罩めた湯殿へ這入つて行つて、邪魔されないやうに、そこへ閉ぢ籠つた。手作りの酒を一クオールト(六合强)ばかり下げて行つた。

翌日の朝迄に脚本が書き上つた。事實、主になつて書いたのはモーコフであつた。他の兩人は、たゞ、立合つてちよつと手傳つただけであつた。三人共、まるで長い病み疲れの後みたいに疲れきつて、ひよろ〳〵と新鮮な戸外の空氣に出て來た。さうして、よろけ乍ら足を引摺つて、しかも大氣嫌で自家へ歸つて行つた。皆んな顏を煤だらけに汚してゐた。

『おつ母あ!』

パウエルはもうすつかり紳士氣取りで話し掛けた。

『作者にお茶でも御馳走してくんな。俺あ、もうレッキとした作者樣だ。俺あ、素晴しく受ける芝居を書いたんだ。悲劇をね。題はかう云ふんだ。――『プロレタリヤ革命への一擊、或ひは、

薄倖な花嫁アンヌユシュカ。』つてね。そりや大した當て場があるんだよ。泣かす所もありや、ほら、俗に云ふ愁歎場つて奴さ。そうかと思ふと、おつ母あ、それこそお臍が茶を沸かすつてな所もあるんだ。』

村の小町娘のタンヤは、勿論、決して役を引受けつこないに違ひない。彼女はほんのちよつぴりもパウエル・モーコフに惚れてはゐなかつた。モーコフもてんでそんな氣振りを見せなかつた。だが、內心モーコフはいろいろ手を盡して、彼女の氣を引いて見たのだが、どつこい、さううまくは烏賊の何んとかで、……彼女は振り向きさへもしなかつた。

だが、まあ良いわ。芝居を見りや、又御意が變らうと云ふもの。

毎日稽古が續いた。脚本には根本的の改作が行はれ、外題も新しいのがつけられた。曰く、『アンヌユシュカの犬死、或ひは、爐の中のブルヂョア。』

愈々公演の前の一週間と云ふもの、村のどこへ行つても、『アンヌユシュカの犬死。』の字を見、耳にした。娘達は家からそつと粗い亞麻布のこま布を持つて來て、背景に提供した。若者

共は繪具を塗る爲、麻の種油をちよろまかして來た。村の鍛冶屋のフィラートは、官地から胡粉や、繪具を搖つ拂つて來た。終ひには、祭司の娘迄が、教會から聖像燈の小罎を算段した。

まめなパウエルは途徹もない大きな貼札を作り始めた。——紙を二十枚ばかり貼り合せ、それを自分の家の床の上に敷いて、一日中腹這ひになつて、はあはあ息を切らせ乍ら、虹の七色を皆んな使つて、字を書いたり、アンダーラインをつけたりした。

特別に念を入れて、かう書かれた。『作者、パウエル・テレンチツチ・モーコフ、赤軍機關銃手之を作る。』それから、注意書きが續けられた。『此の悲劇には空彈を發射する場面がありますから、前側の人も、後ろの人も決してお騷ぎにならないやうに。Khodynka(モスクワ郊外の廣場で、一八九四年の戴冠式の折、餘りの人出で、多勢の人死を出した事件あり。)のやうな騷動を起すといけませんから。』そして終りにもつて行つて、『舊制度に依ると六時、新制度では三時間早く始めます。作者、モーコフ敬白。』それから又三枚ばかりの掲示紙が別々に作られた。『床の上へ唾を吐かないやうに。』『開演中に高話をしない事。』『中入の間も靜肅に、決して喧騷にわたらない事。』

どのビラにも終りへもつて行つて、作者、モーコフ敬白、と、書き足された。

衣裳稽古が濟んだ時、モーコフは獨り悦に入つて、さう云つた。

『皆の衆！　もう大丈夫だ。うまく行くぜ、きつと。てえした人氣を起すぞ。』

右手を腰の上に當てて、赤い星章の帽子を氣取つた斜つ冠りにして、彼はタンヤの家の側を通つて行つた。

そしてその翌日、彼は町へ出て、州の政治教育課の人を一人、初日の晩に招待した。

愈々當日が來た。人々は近在の村々から、わんわん云つて集つて來た。彼等は奇妙さうな顏をして、學校の門に貼りつけられた廣告ビラを眺めやつた。

校舍はやつと二百人ばかりの人しか這入れないのに、殆ど五百人近くの人が集つて來た。まだ三時だと云ふのに、講堂はもう立錐の餘地もなかつた。見物人はやたらにそこいら中へ唾を吐いた。呶鳴つた。そして、『どうぞ、煙草は御遠慮下さい。作者、モーコフ敬白。』と云ふ貼紙は、無慈悲にも剝がされて、煙草の卷紙に使はれて了つた。部屋の中の空氣は、煙草の煙で青く

曇つて了つた。その日は嫌やに蒸暑い、息のつまるやうな天氣であつた。お腹の大きいマトレナの小母さんは陣痛を感じた。彼女は叫び出したので、室外へ連れ出された。

五時になつて、パウエル・モーコフはそろそろ用意に取り掛つた。汗だくになつて、國民兵の男と並び、彼は入口の所で、押して來る群衆を堰き止めてゐた。

『さあ、皆んな。歸やつた、歸やつた。もう定員以上入れちまつた。』

彼は興奮して叫んだ。

『壁がゴムで出來てりや、眼れもするが、お氣の毒な事にや、木造だ。』

『パシヤ！ おい、入れてくれ。……俺達、どんな隅っこでもおさまらあ。……さあ、卵だ。……バタも出すぞ。』

前列の方には村の惡太郎連が頑張つてゐた。パウエルは口穢く罵り乍ら追ん出した。その後へ、村のお歴々を案内した。町の來賓用に祭司の家から借りて來た臂掛椅子を、彼は脚を上にして置いた。

『構うもんか、兄弟！ 中入の時、潜り込んでやんべ。』

百姓達はお互ひに慰め合つた。

『奴等、首つ玉ひつ摑んで引摺り出してくれべ。どうせ奴等、すつかり見て居やせんからの。』

六時頃、停車場から、州の政治教育課の代表が到着した。綺麗な頭髪の、男振りの好い青年、同志ワシュチンと云ふ男。パウエル・モーコフは大いにびつくりした。——髭の生えた男が來ると約束したのに、見るが良い。——あなたですか！ パウエルは、だが、そこんとこのこつをちやんと辨へてゐた。彼は慇懃なお世辭を雨のやうに浴びせ掛けた。その男を自分の家へ案内して、母親に世話を頼み、自分はその足で急いで學校へ戻つて來ると、早速第一の振鈴を鳴らした。群衆は唾を吐き、鼻をかんで、そして靜かになつた。皆んな見物の仕度をした。

同志ワシュチンは旅の埃を洗ひ落した。鏡の前に立つて、頻りとめかしこんだ。香水を身體中へ振り撒いた。パウエルの母親は、せつせと手傳ひをして着物を着せた。彼女は、此の客人が十字架を持つてゐないのに氣が着いて、ひどく驚いた。それに、白のズボンを穿いてゐるとは。

一つばしの二枚目氣取りで、オホンとばかりに、簾のステツキを小脇に挾み、煙草の煙をぷつと吹いて、此の頰の赤い同志ワシユチンは、さて、芝居へと出掛けた。彼の粋な上着の懐には、パウエルの母親が入れてくれた乾酪菓子が、二つ程這入つてゐた。

『お腹が空いたら、あんた、食べさつしやるが良い。』

第二の振鈴は後れた。樂屋の騒ぎと來たらなかつた。パウエル・モーコフは苛々と當り散らした。若い鍛冶屋のフィラートがその側杖を食つた。何よりもフィラートは、舞臺裏で、鳥や、けものや、それから赤ん坊の泣聲迄やらなければならなかつた。――パウエルはかう云ふ細かい効果を、自然らしい感じを出す爲に搾ぎ出したのだ。稽古の時、これ等の鳴聲は素晴しい効果をおさめた。所が丁度初日の前の晩、此の鍛冶屋の若僧さん、熱い露西亞風呂の後で、氷のやうに冷やした Kvass（サイダーのやうな清涼飲料。）をちよつとばかり飲み過ぎて、すつかり咽喉を痛めて了つた。嗄れ聲を出す。――どんな工合に行くか、この所、惡魔だけが御存じと云ふ有樣だ。牡鷄はまるで烏のやうな聲を出した。赤ん坊は、それこそ、荒熊でもびつくり仰天、腰

を抜かして逃げ出しさうな、げにも恐ろしい聲を出して泣いた。

『チヨツ！　白痴！』

パウエルは忌々しげに唾を吐いた。そして、ぐるぐるとあたりを見廻すと、急に叫んだ。

『後見役は何所へ行つた？　大急ぎで呼んで來てくんな。早く早く。』

柱時計の時針は遠慮なく七時に近着いた。暑さと、待ち草疲れで、見物衆は汗ぐつしよりになつてゐた。あつちでもこつちでも娘達が首を伸した。そして物珍しさうに見渡した。

『あら、何んてお綺麗な方なんでせう！……まるで繪のやうだわ。』

タンヤは二度程側を通つた。とう〳〵思ひ切つて話し掛けた。

『今晩は、同志！』

そして、汗で濡れた手を差し出した。目立つて身長の高い、格幅の良い彼女は、白い服を着、白の上靴と靴下を穿いてゐた。

『戸外へ行つて少し涼んで參りませう。お嬢さん！』

そして、ワシユチンは彼女の腕をとつた。タンヤの腕は熱く上氣して、いかにも肉附きが良

かつた。

娘達は溜息を吐き、もぢもぢしてゐた。若者達は意味ありげに咳拂ひをした。——誰か、我慢がし切れずに、ピーつと長い口笛を吹いた。

國民兵の男と、オフィミウシュカの息子の元氣な若者、ワンヤツカは、後見役のフェドチイチを探しに、村中走り廻つた。

『そりやひどいのよ、此の村の退屈さ加減と來たら。全く無智なんですもの。……』

扇で、自分とそれから伴侶の男に、七分三分に風を送り乍ら、タンヤはそつと溜息を吐いた。

『あなたは、あなたは町に居らつしやつたんですか?』

『えゝ、さうよ。ヤロスラブルに居りましたの。妾、馬鹿だつたのね、Bourzhuika（ブルヂョアの女性。）の所に奉行してゐましたの。そりや厭やな奥さんたらありやしなかつたわ。今ぢや、妾、Bourzhuis（複數。）なんて大嫌ひ。此村にはお友達になるやうな娘さんなんて、一人もゐないのよ。考へてもご覽なさい。此の邊の娘達と來たら、ちやんと精を入れて、正式に結婚するなんて事は殆どないのよ。……あなたはお有りなんでせう?』

そして、タンヤのふつくらとした眞紅な唇は、輕く微笑に開いて行つた。

『さあ、何んと申したら良いでせう。あると云へばあるし、ないと云へばない。……まあ兩方ですね。』

ワシュチンは陽氣に笑つた。そして彼の腕はもう我慢がし切れなくなつた。

『何んと云ふ可愛いんでせう。タネチュカ!』

『あら、妾、きまりが悪いわ、ほんとに。あなたはほんとにお口がお上手ね。まあ、何んて良い匂ひなんでせう。……あら、いやよ、腰が壓れて了ひますわ、そんなに、……』

タンヤと客人は足早に、花壇に沿つて、野菜畠の中を通つて行つた。

夕方は不思議な位靜かであつた。日が沈んで行く。人つ子一つ目に這入らなかつた。——親猫が一匹、子猫をつれて、路傍の白樺の根下に遊んでゐるばかりであつた。一筋の光がそこの納屋の小窓を漏れて、この暖い黄昏の空氣の中にさしてゐた。隅に堆まれた枯草の小山を、綺麗に輝かしてゐた。

穀物と、塵と、鼠と、燕の巣の匂ひが、納屋の中には漂ふてゐた。

『同志諸君！』

パウエル・モーコフが幕の前に現れた。

『お靜かに願ひます、お靜かに。皆さんには何等關係の無い、或る事情に依りまして、その、同志諸君よ、つまりその、只今、後見役の居所が不明なのです。……卽ち、その、今ちよつと見付からないのでして、……卽ち、その爲に、同志諸君よ！　開幕を新制度に依つて開ける事になりました。』

忽ち方々で騷ぎ出した。

『よし來た。そんならそれでやつてくれ。……兎に角早くしてくんな。開けるんだ。パシユカ！お太陽樣の上らねえ先きから來てる連中もあるんだからな。……お腹が空いて、しびれが切れてらあ。』

すると又向ふで叫んだ。

『こいつあ、皆んな胡摩化しだ！　俺がの壺入りの乾酪を返えしてくんろ。卵を返えせ。』

だが、パウエル・モーコフは一向お構ひなしに、國民兵の男と、オフィミウシユカの伜、ワンヤツカに後を頼んで、自身後見役を探しに飛んで行つた。

後見役の男と云ふのは、年老つた兵隊で、フエドチィチと言ひ、パウエル・モーコフにとつては養伯父に當つてゐた。

彼はお葬式の時の良い讀手である。醉っ拂ふと酒癖が惡くて、よく取つ組合ひを初める。そのお蔭で前齒がすつかりかけてゐる。それにも關はらず、彼は申し分のない立派な後見役であつた。若しも役者連中が途中でトチつたり、言ひ淀んだりすると、直ぐ彼は巧みにその役者の聲色を眞似て、必要な臺詞をどんどん饒舌つてやる。

パウエルは彼の家へ駈けつけた。思つた通り、——鍵が掛かつてゐた。彼は今度は隣りの家へ行つた。納屋を覗いて見た。そしてお終ひに湯殿へ行つた。そこで彼はかんかんに怒つて了つた。——そこにフエドチィチが、好い氣になつて。仰向け樣に寢そべつてゐるではないか！兩足を高く空にもち上げて、湯棒でそれをぴちやぴちや敲いてゐた。頭中石鹼だらけにして、まるで白帽を冠つたでぶでぶのお婆さんみたいな恰好をしてゐた。

『馬鹿々々しいにも程がある。もうあんたには用無しだ。』

パウエル・モーコフは足を踏みならして呶鳴つた。

湯棒がびゆうびゆう、まるで絹でも裂くやうに鳴つた。

『あゝ、お前か、パウルーカ？　早く、裸體になんな、シャツとズボンを脱いでな。まだ溫いわ、え、おい。……』

『芝居！　ほんとに、老ひぼれのろくでなしだ。……芝居ですつたら。……』

『何んの芝居だね？　何をまあ、そんなにお前はひとりで騒いでるんかね？　一體今日は何んの日や？』

急に彼は飛び起きた。

『あゝ、――あゝ、――あゝ、あゝ！……』

『蒸氣が出過たんかね？』

フエドチィチは慌ててシャツの中へ頭を突つ込んだ。

『頭を洗ひ落さにや、え、石鹼だらけぢや。』

『あゝ、――あゝ、――あゝ！……俺あ、まあ何んて白痴だんべ。まあ、苺とりに森さ行き居つたんや。……あゝ、――あゝ、――あゝ、――あゝ！……』

振鈴が氣を惹くやうに鳴り渡つた。舞臺が開いた。さうすると、それにつれて、見物衆の口が皆んな開いた。よく肥えた、かつぷくの良い Popadya（祭司の奥さん、さしづめ日本の梵妻と云つた所。）が舞臺に現れた。

村の若い娘は誰も此の老女役を引受けなかつたので、例の鍛冶屋のフィラートが此の役を買つて出た。彼の顏は馬のやうに長かつた。頭の上にとても大きな帽子を、阿彌陀にまくり上げて冠つてゐた。帽子の前の方には、翼を擴げた烏が一羽附いてゐる。緣には隙間も無く、一杯花の咲いた灌木の枝がぶら下つてゐる。鼻の上にはお手製の眼鏡が乘つかつてゐる。――まるで車の輪のやうだ。彼は馬鹿にひよろ長い、それこそ骨と皮ばかりのやうな痩せた男である。だが、彼は、至る所へやたらに綿だの何かを詰めこんだので、村の商人の、太つた、ちんちくりんのお內儀さんから借りて來た化粧着は、縫ひ目が皆んな綻びて了ひ、それもやつと腰の所迄しかなか

つた。裾の下から、襤褸で包んだ痩せた蚊脛が、によきつと出てゐた。所で、その足を内股に曲げたり、十字にさばいだりし乍ら、フィラートはいとも優しく、しやなりしやなりと前へ出て來た。

「竹馬に乘つたアフリカ豚だ。」

同志ワシュチンはそつとタンヤの耳に囁いた。彼女は男の顏に熱い息を吐いた。

タンヤはくすくすと笑つた。舞臺では、Popadya がお尻を振り乍ら、氣取つた足取りで戸棚の方へ歩いて行き、そこからウヰスキーの一クオールト壺を取り出すと、そのまゝ、がくがくと立て續けに三杯も飲み干した。

「わい、うまくやってけつかる。」

後ろの方の列から、羨ましさうな聲が叫んだ。

「俺いらにも飲ませろ。」

「お母あさん！　おつ母さん！」

娘のアンヌユシュカが飛んで來る。白い前掛をかけてゐる。

「そんなにがぶがぶウオツカを飲んで、まあ、極りが惡くないんかい？」

Popadya は、えへん！　と先づ咳拂ひをして、さて、嗄れた低音で云つた。

「お前はまあ、子供の癖に、おつ母あのする事、兎や角云ふもんぢやねえ。」

見物衆はどつと來た。

「貴婦人かい、あれで？　――まあ、何んて聲だんべ。」

パウエル・モーコフは舞臺の裏で、兩手で耳を押え、怒りの爲に綠色になつてゐた。

「さう？」

アンヌユシュカがきいきい聲の高音で答へた。

「おつ母さん。忘れちやいけないよ。あたい達は皆んな選擧權を持つてるんだから。あたいはもう、おつ母さんのお說敎の時間には出ないから。あたいはプロレタリヤへ行くんだ。……あたいはコンムユニストだからね。見てるがいいや。」

「何んだ、何んだ？　コンムユニストだ？　お前の許婚の、あのへなちよこ野郎の差金だらう。大した紳士だよ、あいつあ。何がコンムユニストだか、俺いらが今敎えてやる。」

母親は最低音で、雷樣のやうに吼鳴りつけた。それから舞臺を縱橫無盡に走り廻つた。――

帽子の上の烏と叢がめちやめちやに揺れる。

パウエル・モーコフも舞臺裏で、その通りに走り廻り乍ら、隙間から忌々しげに、しいつしいつと呶鳴り散らした。

「何んだつて、そんな、牛みたいに吼えくさるんだ。土偶の坊！　靜かに、もつと靜かに！」

此の荒々しい叱責の聲が、忽ちフィラートの頭を混亂させて了つた。臺詞は皆んな彼の頭から飛び出して了つた。後見役の云ふキツカケの言葉は、彼の耳を素通りして、皆んなどこかそこいらに消えて行つて了つた。

アンヌユシュカもすつかりあがつて了つた。

「あたい出て行くわ。あたい出て行くわ！」

彼女はいとも哀れな泣聲を出して云つた。彼女の眼は、まるで鐵が磁石に吸ひ着くやうに、フエドチイチの齒の脱けた口元へ膠着けにされて了つた。

Popadya は咽喉の通りをよくする爲に、頻りと咳拂ひをした。さうして丁度、フエドチイチのキツカケの言葉が耳へ這入ると、そのまゝ、一段と調子を張上げて、轟くやうな、しかも齒の浮

くやうな聲で喚き立てた。

「恥を知れ！　我が娘！　汝の名はろくでなし！」

「ひどい、ひどい。腐つた臭腸だ！」

パウエル・モーコフの、蛇のやうな、しいつしいつと云ふかすれ聲が、舞臺の上をあちこちと響いた。

「擲めつ面をぶつ壓してくれるぞ！」

「やだわ、あたい、やだわ。」

アンヌユシュカは兩手を絞つた。そして、涙を溜め乍ら、こそこそと舞臺の裏へ駈けこんで了つた。

「ひどい。腐つた臭腸だ！　擲めつ面をぶつ壓してくれるぞ！」

Popadya のフィラートが又雷のやうに呶鳴つた。

後見箱の中のフエドチイチは、拳固でボカボカ床を打ち、馬鹿々々しげに唾を吐いた。

「何んて大根揃ひだ！」

と、忽ち、見物が驚いた事には、聲はすれども姿は見えず、ほんにお前は、……と云つた工合に、目には見えない女の、綺麗に囀るやうな聲が舞臺の方から聞えて來た。

「おゝ、娘よ！　……妾は何んとも云はずに、お前を宥します。」

フエドチィチは高い作り聲で、はつきりと發音した。

「さあ、おいで。妾はお前を固く妾の胸に抱いてやらう。さう。惠みあれ！　惠みあれ！　惠みあれ！」

そこで急に彼は地聲で荒々しく叫鳴り出した。

「アンヌユシュカは何所に居る？　アンヌユシュカを連れて來な。おつたんちん奴！」

アンヌユシュカは舞臺の裏から無理矢理に引摺り出された。氣取つた足取りで進み乍ら、悲しさうにかう叫び乍ら、

「だつて、あたい、あたいは役をよく知んねえんだもん。どつちやになつたんだよ。どつちやにより。……」

そして彼女はPopadya の方へ走つて行つた。Popadya は大きなお腹を後生大事と抱えて、

まるで臼のやうに、默りこくつて立つてゐた。

「おい。その女を祝福してやるんだよ。おつたんちん！」

後見役は拳固でポカポカ床を敲いた。

「惠みあれ！」

Popadya はまるで教會の執事長のやうな低い聲で云つた。

パウエル・モーコフは舞臺裏をあちらこちらと歩き廻つた。

「幕だ！……フィラートの奴、鬼に攫はれちまへ！……あゝ、この出來損ないのへちやむくれ！……初めつからやり直しだ。」

だが、ブルヂョアの許婚の男が、その場のばつをつくろつた。彼は自分の役をすつかり飲み込んでゐた。巧みに彼は登場した。Popadya とアンヌユシュカも、やつと又氣が落着いて來た。フエドチィチの後見の聲が、まるで鶯鳥が百羽もゐるやうに、小屋の中に反響した。そこで奴さん、すつかり好い氣になつて、間を見ちや、ちよいちよい大急ぎで地酒を飲み乾した。アルコールの臭ひが後見箱から漂つて來た。

そこへ身長の低い、鬚を生やした祭司が、法衣を着て、高い教會帽をちよつと斜つちよに冠つて、徐ろに登場した。――アンヌユシュカの父親だ。

『祭司だ。祭司だ！』

小屋中に陽氣な叫び聲が擴つた。

『まあ、見ろよ、兄弟！　とうとう坊さんのお出ましだ。』

薄倖なアンヌユシュカは、醉ひどれの兩親の爲に身を賣られて了ふ。相手の男と祭司は、手風琴の音と、舞踏に合せて頻りと飲み初める。Popadya は夢中になつて、すてて、踊りを初めた。枕が乳の所からお腹の方へ滑り落ちて來た。アンヌユシュカはさめさめと泣いてゐる。見物衆はすつかり喜んで了つた。頻りと手を打つた。

『(パチ、パチ、パチ！) ようよ！』

アンヌユシュカは益々激しく泣き崩れた。が、突然、革の上着を來た一人の勞働者コンムユニストが飛びこんで來た。

『俺はお前を救つてやる！』

『あなた、あなた！』

アンヌユシュカは彼の首っ玉に獅嚙みつく。

さつきの旦つくはきつと身構へる。が、コンムユニストは勢ひよくピストルを引張り出す。

『この女は俺のもんだ。ブルヂョアなんて、地獄へ落ちてくたばつちめえ！』

すると忽ち、祭司と旦つくはたまげて、ぶるぶると寢臺の下へ潜り込んで了ふ。

幕。喝采。わんわと云ふ呼聲。

『(パチ、パチ、パチ！)』

中入はたつぷり一時間かゝつた。もう暗くなつてゐた。燻つた石油洋燈が二つ程ともされた。暗闇はほんのりと明るくなつた。

樂屋の騒ぎつたら、まるで瘋癲病院の中のやうであつた。泣くものもあれば、笑ふものもある。さうかと思ふと、自分の書拔きを大聲で讀み乍ら暗記してゐるのも居る。

『さあ、こいつを生のまゝ呑みこんで見な。』

フエドチィチは鍛冶屋の聲を診察してゐる。
『ほら、さうさう、良いか、ここんとこだ。お前、胃の腑の中に何んか、辿つかへてるんだ。』
鍛冶屋は、一杯堆まれた寄附の贈物の籠の中から、卵をやたらに引拔いてゐる。もう既に十ばかりも呑みこんだ。が、どうも利き目がない。
『馬鹿〳〵しい。』
パウエル・モーコフが喚いた。
『一體お前、何所で聞いたんだ！　あんな聲を出す Popadya をよ。あれじやまるでお前、お湯屋の三助だ。Popadya ぢやねえ。』
『もつと、呑むんだ。……ぐんと樂になる。』
フエドチィチが唸つた、丸々肥えた剃り立ての頭は、赤く汗をかいて、まるで煮湯でもぶつかけられたやうだ。罎の中の地酒は見てる間になくなつて行つた。
見物衆はどやどやと小屋を出て行つた。すると代りの連中が割り込んで來た。戸口が軋んだ。

がちやがちや音を立てゝ、釦がシヤツや上着から捥ぎ取られた。中には、椅子を高々と頭の上にかついで行くものもあつた。自分の席をとられないやうにと云ふのである。
『押せ、押せ！　兄弟！　女の腹綿を押し出してやるがいい。』
骨を碎くやうな混雜が廊下に渦を卷いた。太つちよの、眼鏡を掛けた祭司の伜が、一番勇敢に、人を押しのけ突きのけやつて來た。肘を張り、拳固を振つて、行手に塞る人々のお腹と云はず、脇腹と云はず、背中と云はず、手當り次第、やたらに突きのけた。その癖、厭やに叮嚀に、
『これはどうも、失禮します！　失禮します！』などと繰返した。いたづらな連中は、年老つたイエメルヤの懐へ死んだ鼠を押しこんだ。そして、嗅煙草を一摘みくれと頼んだ。このお爺さんと來たら、それこそ、鼠と聞くと死ぬ程怖がつてゐるのであつた。
振鈴が鳴つた。人々は又波のやうに引返した。隣り村のアンチツプ小父さんは、ちよつと立止つて迷つた。そして街に誰も人が居なくなると、彼は手を振つた。
『やれやれ、何んちふこつた。奴等、あの茶番と一緒に鬼に攫はれちまへ。』
彼は市有の椅子を後ろへおつぽり出して、段々暗くなつて來た黄昏の街を案じげに見渡して

から、さて、何かぶつぶつ祈りをあげ乍ら、家の方へ歩き出した。

『さうだ、俺は日曜日に又來るべえ。』

『お靜かに、同志諸君！　お靜かに。』

パウエル・モーコフは此の喧騒の中で、自分の聲を通らせやうとして骨を折つた。

『思ひ設けぬ事情の爲に、同志諸君よ！　前幕迄の Popadya はのつぽでした。が、今度の幕から彼女はすんと身長が低くなります。それから親父、卽ち彼女の夫ですな、それは又反對にとてものつぽな男になります。だが、あゝ、別に氣に懸ける事はありません。役割の變向です。——ただそれだけの事です。ぢや、同志諸君！　これから三度目の、つまり最後の振鈴を鳴らします。』

幕が引かれた。見物衆は半分眠りかけた寢呆け眼で舞臺を凝視めた。

よろよろし乍ら、Popadya が登場する。前幕とちつとも變らない衣裳を着けてゐる。ただ、足

が短く、聲がきいきい聲であつた。その後ろから、今度は太つちよの祭司が出て來る。同じ臺、同じ鬚。——ただ、法衣が膝の所迄しかなく、襤褸で包んだ細い蚊脛がによきつと顏を出してゐた。

見物はどつとわいた。

『何んだつて、お前さん、Popadya の足をちよん切つちまつたんだね？』

『やう、お婆さん、いつちよう踊ろぢやないか！』

『わい、祭司が一人前半だ！』

アルコール漬けのフェドチィチは、やつとこすつとこ後見箱へ這ひこんだ。だが、やり出すと、驚く可き程はつきりと、明瞭にキツカケをつけた。見物衆は、廊下にゐる立見の連中迄、一時に二つの芝居を聞けて喜んだ。——後見箱からと、も一つは舞臺から。

フェドチィチの脂肪油の洋燈が、——山羊の油を容れた小皿に、麻屑の燈心を浸したものであつた。——それが丁度鼻の先へ燻つて來た。

舞臺の上の仕草は、まるで油でも塗つたやうに、圓滑に進行した。例のブルヂョアの旦つくは有無を云はさず追ん出され、戀人のコンムユニストが家の中へ這入りこんだ。かくて、アン

ヌユシュカは子供を儲けたのだ。今その赤ん坊が子守籠の中に寝かされて、ひいひい泣いてゐる。祭司（今度は例の鍛冶屋のフィラートが演つてゐる。）がその揺籃をゆすぶつてゐる。

彼は云ふ。

『こいつあ、コンムユニストの赤ん坊だ。』

そこで彼は低い聲で子守唄を唱ひ出す。

『坊やはいい子だ、ねんねしな。
コンムニストの芽が生へる。』

『それ見た事か、――とうとう赤んぼなんかひり出しやがつて。』

Popadya がさも憎々しげに云ふ。

『奴等、又、お前のこのコンムユニストの馬鹿野郎を、戰爭にけしかけるんだ。』

『あゝ、妾、情けない、情けないわ。』

アンヌユシュカが叫ぶ。そして揺籃の側に跪き、子供に云ひきかせるやうな恰好で獨白を初める。後見箱の方へ、まるで膠でくつ附けたやうに眼をやつてゐる。そこには、心細い灯が、黒い舌を上に伸して燻つてゐる。そしてフェドチイチが、――何事ぞ！――頻りと鼻を歪めて、齒を剝き出してゐる。

『あゝ、妾、情けない、情けないわ。……妾の可哀いさうな孤兒！……』

突然、後見箱でただならぬ物音と、荒々しい鼻息の音がした。それが小屋中に響き渡つた。『（チ、チ、チク！）』心細い灯は消えて了つた。フェドチイチは足を踏みならし、そしてもう一遍嗅いで見て、さて呶鳴つた。

『わい、バシュカ！　早く、早く灯をくんな。……俺の脂肪、……（チ、チ、チク！）――脂肪洋燈が消えちまつたんだ。』

舞臺裏ぢやすつたもんだの大騒ぎ。がたがたさせたり、ひそひそ囁き合つたり、わんわん呶鳴つたり。燐寸はとうとうなくなつて了ふ迄擦られたが、燈火は點かうともしない。

『情けない、妾、情けない、情けないわ。』

心細くアンヌユシュカが呻く。

『待つて居ろ、そこで。お前も、それからお前の「情けないわ。」も。』

後見箱(プロンプターボックス)から攀ぢ上り乍ら、フエドチィチが呶鳴りつけた。

『お前が情けないなら、俺いらあ二倍も情けないんだ。見ろ、脂肪油の洋燈(ランプ)が消えちまつたんだよ。』

彼は舞臺の隅迄四つん這ひに這つて行つた。頭を、まるで牛が怒つて何か突きさしでもするやうな恰好をさして。

『(チ、チ、チク!)……おい誰かあ。……(ブ、ブ、チキ!)……わい、どうしてくれるんでえ!……誰か燐寸を持つてねえのかよ?』

見物は大笑ひに喜んで答へた。

『ここにあらあ、おつすあん! ここだ、ここだ、ここ。』

そして、又圓滑に芝居は運んで行つた。

アンヌユシュカは赤ん坊の上に身も世も非ず泣き伏して、極めて自然に愁嘆場を演じ、それ

こそ、人の腸を斷つやうな臺詞を饒舌つたので、見物の頭に一番強い感銘を與へた。女連は鼻を啜り出した。百姓衆は駱駝のやうに鼻を鳴らした。

オフィミウシュカの倅のワンヤツカは、卵三つで雇はれて、フィラートの代りに舞臺裏で赤ん坊の泣聲をやつた。彼はすつかり實感を籠めて、それにいろ〳〵工夫もして、あらゆるやり方で泣いた。

だもんだから一人の百姓などは、アンヌユシュカに向つて、心底から氣の毒がつて叫んだ。

『お乳をやんねえ、よう。』

それから女の聲で、

『おもらしだよ、きつと。あの赤ちやん。』

そんな譯で、この幕は素晴しい成功のうちに幕が下りた。皆んな滿足した。ただ、パウエル・モーコフだけがさうでなかつた。齒ぎしりさせて、彼は、醉つ拂つたフエドチィチの肩を掴んでゆすぶつた。

『お前さん、それでも、俺らがの伯父さんかい。呆れた木偶(でく)の坊だ。使ひもんにも何んにもな

りやしない。大體あんなガラクタな、脂肪油の洋燈なんか使ふつて法があるもんか。ろくでなしのおつたんちん！」

村の方で牡鷄が三度目のときを告げた。村の青年共が二三人、手風琴を鳴らし乍ら、遠くの方から、タンヤとワシュチンの後を追けて行つた。兩人は小屋を拔け出して、又花園を拔けて歩いて行つた。若衆達はタンヤの事を歌にして呶鳴つてゐた。どうせ惡口には定つてゐる。

『おい、役者衆！』

見物は小屋の中で叫んだ。

『もつと早くやつつけてくんな。……もうおやすみになる連中もおありになるんだよ。』

それは嘘ぢやなかつた。窓枠へ腰を掛けたり、窓の下の壁に凭れて、ぐつすり寢込んでゐる連中が多勢あつた。

幕が下りた時、急に、おつそろしい鼾聲が沈默を破つた。それはアンドロン爺さんであつた。

身體を三つ折りにして、禿頭を丁度前の列に坐つてゐる、太つた大きな女の脊中に凭せかけてゐた。ぐう〳〵鼾をかいて、涎を口から長く垂らしてゐた。他の眠つてゐる連中も、負けない氣になつて鼾をかいた。

役者はすつかり上氣嫌であつた。此の幕は陽氣な幕である。——ダンス、歌、輪投げ遊び、そしてそれがアンヌユシュカの死で幕を閉ぢる。性惡のブルヂョアの旦つくが、前の幕で出し拔かれた腹癒せに、突然現れて來て、此の薄倖なアンヌユシュカを、致命的な彈丸で斃すと云ふ筋であつた。これがこの劇の最高潮であつた。これこそ、見物衆の心を胸の奥底から感動させなければいけない。それだからこそ、パウエル・モーコフが意味ありげな、勝ち誇つたやうな微笑をにや〳〵と口邊に浮べて、熊を打つ獵銃へ、たつぷり火藥を詰めこんだのも、亦宜なる哉である。——兎に角、こいつあ大砲のやうにぶつぱなさなくつてはね。

だが、あの浮氣なタンヤの瞳が、どんな火と燃えてゐるか、そして何んの情熱で彼女の心臓が彼女の胸の中で波打つてゐるかを、若しも今、パウエル・モーコフが見たならば、彼のこの微笑は立ち所に、狂熱なる嫉妬に席を讓つたであらう。

御兩人はぴったりと、肩と肩とをすり寄せて、並ん坐つてゐた。同志(トバレシチ)ワシュチンは香水と煙草の匂ひがした。そして、美しいタンヤ、――彼女は小麥の粉と、鼠と、燕の巣のにほひ。

松と樅の木立。河の畔。アンヌユシュカは赤ん坊を抱いて、石の上に腰を下してゐる。

『何んて氣持のいいタ方なんでせう。』

彼女が云ふ。

『坊やはいい子だ、ねんねしな。ほーら、お牛がもうもう。お犬がわんわん。何んて可愛い鳥の鳴聲なんだらう。あら、夜鶯(ナイチンゲール)が、……』

卵の利き目が斷然現れて來た。フィラートは舞臺裏で、或ひは高く、或ひは低く出來るかぎりの聲を震はせた。男の子と女の子が多勢舞臺へ現れる。輪投げ遊びを初める。夜鶯(ナイチンゲール)が歌を唱ひ、家鴨が啼き、蛙が鳴き、牛が鳴いた。

『まあ何んて陽氣な事。妾にもお仲間入りをさせて頂戴、ね？　いいお子さん達。』

アンヌユシュカが涙乍らにさう云つた。

『お父つつあんとおつ母さんが、妾をこの不幸せな子供と一緒に、お家(うち)から追ん出しちまつたの。妾の旦那はコンムユニストで、あの憎らしい白衛軍の惡者に嬲り殺しになつちまつたのよ。もう幾日も何んにも食べないの。』

アンヌユシュカはよよとばかりに歔欷いた。子供達は何かと彼女を慰めた。皆んなたかつて赤ん坊をあやした。どこからか馬が嘶き、猫がミュミュと鳴き、牡鷄がときをつくつた。

『あゝ、あゝ、妾にもう一遍、あの懐しい日を返しておくれ。』

見物衆は溜息を吐いた。方々から鼾の聲が束になつて聞えて來た。後見箱(プロンプターボックス)の中で、とつくの昔に白河夜船を定め込んだフェドチィチが、鼻で調子を合せた。アンドロン爺さんの禿頭は、前の小母さんの襟から、でぶ〳〵した脊中の方へ滑り落ちた。

突如としてブルヂョアの旦(だん)つくが叢の陰からおどり出る。木製のピストルを手に握つてゐる。

悲劇が近着く。

舞臺裏では、パウエル・モーコフが銃の引金を用意した。

『おゝ、ここに居たか、俺の不貞の女！。』
そこで旦つくは、づかづかとアンヌユシュカに詰め寄る。
『退きやがれ、餓鬼共！　一緒に撃ち殺してくれるぞ。』
叫喚、どつた返し、混亂、そうして忽ち舞臺は空になる。
ブルヂョアの顏は滿面朱をそそいで燃え上る。彼はいきなり赤ん坊をひつ掴む。逆さにぶら下げて、頭を地面に敲きつける。そしてお終ひに河の中へ投げこんで了ふ。
アンヌユシュカは石のやうに固くなつて立ちつくす。そして見物衆は皆んな、はつとして固唾を呑んだ。
『さあ。』
と旦つくが叫ぶ。いきなり女の腕を掴む。
パウエル・モーコフは銃口を壁の隙間へ押し込んだ。
『だつて、だつて、お父っつあんも、おつ母さんも、妾も、皆んな、あなたは死んだものとばかり思つてたんですもの。』

全身がたがた震へ乍ら、アンヌユシュカが云つた。
『飛んでもねえこつた。……さあ、このコンムユニストの賣女奴！　早くお念佛でも唱へろ。くたばつちめえ、このろくでなし！』
そして旦つくはピストルをアンヌユシュカの胸に當てた。
『あゝ、さらば、麗しき人生！』
アンヌユシュカがよろめいた。そして、どの邊へ倒れてやらうかと、見當をつけ乍ら、ちよつと後ろを振り返つた。
パウエル・モーコフは貪るやうに引金を引いた。所がこれは大變、音が鳴らない。
見物衆は口を開けて息を殺した。
『くたばつちめえ、このろくでなし！』
もう一遍旦つくがむしやうにが鳴りつけた。
『あゝ、さらば、麗しき人生！』
アンヌユシュカは絶望的に呻いた。そしてもう一度よろめいた。

舞臺裏ぢや、パウエル・モーコフが頻りと手を振り乍ら、新しい彈丸を詰め替えた。だが、又失策つた。呶鳴つたり、ぶつぶつ云つたりし乍ら、パウエルは頻りとこの錆びついた彈丸の中から、新しさうなのを撰り出してゐた。

一方舞臺では、旦つく先生、すつかり困り切つて了つて、嘆願するやうな眼差しを舞臺裏へ投げてゐた。ピストルを頭の上へ振りかさし、狼狽し切つたアンヌユシュカの胸へ、もう一遍狙ひをつけた。

「くたばつちめえ、このろくでなし！」

見物衆の中で聲がした。

「どうしてあの女あ、くたばらねえんだ？」

「あゝ、さらば、麗しき人生！」

三度アンヌユシュカが呻いた。そして三度舞臺裏の發火は失策つた。

パウエル・モーコフの髪の毛は逆さまにおつ立つた。彼は忌々しげに齒を噛み鳴した。旦つくは木製のピストルを投り出して叫んだ。

「チエツくしよーいだ！」

そして、何かやたらに罵り乍ら、どんどん引込んで行つて了つた。

アンヌユシュカはすつかり途方に暮れて了つた。とうとう終ひに、よろけて倒れて了つた。

「幕だ！　幕だ！」

舞臺の裏で誰かが呶鳴つた。

だが、此の時、忽ち轟然たる銃聲が雷のやうに轟き渡つた。

滿場の見物衆はびつくりして跳ね上つた。喘いだ。

今迄鼾をかいてゐた後見役（プロンプター）のフエドチイチも、はつとして飛び起きた。後見箱（プロンプターボックス）が頭と一緒に飛び上つた。窓の上で居眠りしてゐた連中は床（ゆか）の上へ轉げ落ちた。床の上で寢てゐた奴は飛び上り、又すつ轉んだ。そして、何事が突發したのかとばかりに、慌ててあちらこちらと這ひ廻つた。

アンヌユシュカは駈けこんで了つた。幕が靜かに下り初めた。

『同志諸君！』

ワシュチンは素速く椅子の上に飛び乘つた。

『えゝ、私は、その、地方教育並びに政治運動省の第一分署、演劇部の上演目錄詮衡委員の一員でありまして、……えゝ、その、……』

百姓衆は皮肉げに笑つた。

『謹聽、謹聽！　やうよ、それから。』

『キリスト教信者らしく饒舌つてくんな！……露西亞人らしくな！』

『えゝ、同志諸君！　實は、此の隣りの官地にあります主家を、此の度、民衆の爲に開放致しまして、氣の利いた娯樂機關に致す筈になつて居ります。私はその委任狀を持つて居ります。えゝ、卽ちこれがそれです。サキエート政府はいつでも、喜んで、皆さん方の精神的要求に應じ度い考へを懷いて居ります。さあ、皆さん、終りに臨み、私に合せて萬歲を三唱して下さい。

――作者、作者、作者！』

そこで見物衆はこの同志ワシュチンに合せて、破れるやうに呶鳴つた。

だが、舞臺の裏では作者先生、頭を机に押し當てゝ、めそめそと泣いてゐた。

ワシュチンは舞臺の後ろへ潜つて行つた。そして、此の態を見て、ちよつと面喰つたやうに立止つた。

『同志モーコフ！　何んて云ふ事です。見物衆は皆んなあんたを待つてゐる。え？　さあ、お出なさい。――早く、さあ。』

パウエル・モーコフは手の甲で眼をこすつて立上つた。そして、もうすつかりぼをつとして了つた。あつちへぶらぶら歩き出したかと思ふと、今度はひよつこり立止つたりした。小屋の中の仄の暗い見物席から、無數の瞳が燃えるやうに彼を見上げてゐた。

その内に、フエドチィチは、よろよろよろけ乍ら、舞臺の上を探し廻つた。彼はやたらに喧嘩を吹つかけ度かつた。

『同志諸君！　さあ、あなた方の前に立つてゐる此の人こそ、今、皆さんが御覽になつた芝居の作者さんです。……彼の名譽を讃えやうぢやありませんか。天才作者パウエル・モーコフ萬歲！　ブラボ！　ブラボ！』

ワシュチンは頻りと手を拍つた。するとその例を見習つて、舞臺の上の人々、そしてやがて滿場の見物衆が喝采した。

『ブラボ！（パチ、パチ、パチ！）ブラボ！　いやう大將、パシュカ！　心配しなさんな！何をくよくよ川端柳、つてね……謹聽、謹聽！……パウエル！　さあ何んとか云つた。何んだつて默つて突つ立つてるんだい？』

『滿場に代つて、彼の名譽を讃えさせて貰ひます。ウラー！』

ワシュチンは頻りとつとめた。

フエドチイチは拳固を固めて唾を吹つかけた。先づ咳拂ひをして、それから齒を喰ひ締つた。

パウエルは鷲のやうな眼付をタンヤの方へ投げかけた。それから窓を見た。そこにはもう白みかけた桃色の曉が、こつそりと慕ひ寄つてゐた。此の得意の絕頂のうちに、はあはあ息を吐き乍ら、彼の演說が初まつた。

『えゝ、同志諸君！　全くその通りです。つまり私が、その、全體の作者でありまして、つまり、その……』

だが、その瞬間、忽ち彼は、首の背後から鋭い打撃を受けて、よろよろと打倒れて了つた。

『よくも此の年老つた伯父さんを袖にしくさつたな。かつたい棒！　思ひ知つたか。え、おい。』

滅茶苦茶に拳固を振り廻し乍ら、フエドチイチが嗄れ聲で喚き立てた。

『滿場に代つて、俺いらがお祝ひ申してやんべ！……』

『その翌る日、同志ワシュチンは町の方へ歸つて行つた。それと同時に、小町娘のタンヤの姿が消えて了つた。そして、此の『アンヌユシュカの犬死』の興行が濟んでから、學校では官有の椅子が總計七つ紛失した。

パウエル・モーコフは此の運命の殘酷な打擊に、すつかり押し壓されて了つた。それからと云ふもの、しよつ中養伯父のフエドチイチと一緒に、ぐでんぐでんに醉ひどれ歩いた。彼等は納

屋で飲んだ。學校の側の、野菜畠の裏手の、あの納屋の中で飲み明した。

「怒らんでくれ、なあ、おい。お前の首つ玉あ殴つたなあ、俺いらが惡かつた。」

微醉氣嫌になると、フエドチイチがきまつて管を捲いた。

「だがなあ、お前、あんな芝居なんか續けてやつてて見ねえ、それこそ、俺達あ、家具も娘も皆んな亡くして了はあな。え、おい。」

——終り——

大正十五年五月八日印刷
大正十五年五月十日發行

一週間
定價 金一圓八拾錢

著者 池谷信三郎
發行者 山本英
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
印刷者 淺野榮作
東京市芝區愛宕町三丁目一番地

版權所有

發兌 改造社
東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
振替東京八〇二番
電話高輪四九九三番

賀川豐彦著　死線を越えて　（上　卷）　三・〇〇　二・二四
賀川豐彦著　死線を越えて（中卷）太陽を射るもの　二・八〇　二・二二
賀川豐彦著　死線を越えて（下卷）壁の聲きく時　二・八〇　二・二四
賀川豐彦著　星より星への通路　二・〇〇　二・二〇
賀川豐彦著　生存競爭の哲學　二・〇〇　二・二〇
谷崎潤一郎著　愛すればこそ　一・六〇　一・一八
谷崎潤一郎著　愛なき人々　二・〇〇　二・二〇
谷崎潤一郎著　新選谷崎潤一郎集　五・五〇　二・二七
谷崎潤一郎著　痴人の愛　二・〇〇　二・二二
谷崎潤一郎著　鮫人　二・〇〇　二・二二
菊池寛著　第二の接吻　二・〇〇　二・二二
菊池寛著　戀愛病患者　一・五〇　一・一八
菊池寛著　啓吉物語　二・〇〇　二・二二
武者小路實篤著　愛慾　一・六〇　二・二〇
武者小路實篤著　第三の睡者の運命　一・九〇　二・二〇
吉田絃二郎著　芭蕉　一・六〇　一・一八
吉田絃二郎著　運命の秋　二・〇〇　二・二〇
吉田絃二郎著　ダビデと子たち　一・八〇　二・二〇
吉田絃二郎著　父　一・九〇　二・二〇
志賀直哉著　雨蛙　二・五〇　二・二二
志賀直哉著　壽々　二・五〇　二・二二
芥川龍之介著　沙羅の花　二・八〇　二・二〇
芥川龍之介著　支那游記　二・〇〇　二・二〇
山本有三著　嬰兒殺し　二・〇〇　二・二〇
田沼利男譯　鬼火の踊り　一・八〇　一・一八
里見弴著　直輔の夢　一・五〇　二・二〇
里見弴著　綠談　二・三〇　二・二〇
細井和喜藏著　女工哀史　二・〇〇　二・二〇
細井和喜藏著　工場　二・〇〇　二・二〇
細井和喜藏著　奴隸　二・〇〇　二・二〇

551
144

終